

履修モデル

2021 年度

法政大学 人間環境学部

A. 目次

A. コース制について 3

- A.1 コース制のねらいと意義 3
- A.2 コース概要 4
- A.3 「研究会」や講義との関係 5
- A.4 コースの登録 5
- A.5 5つのコースの関連科目 5
- A.6 コースをこえた学習上の創意工夫 5

B. コース制と履修モデル 6

- B.1 履修モデル一覧 6
- B.2 履修モデル 7

A. コース制について

人間環境学部では履修を進めていく上でのガイドとなるよう「コース制」を設けています。2016 年度以降の入学者は、2 年次から 5 つのコースのうち一つを選択し、コース共通科目（10 単位以上）とコースコア科目（20 単位以上）を履修することが求められます（SSI 生はコース共通科目から 8 単位以上、コースコア科目から 12 単位以上）。なお、2015 年度以前に入学した学生は該当しませんが、コース共通科目とコースコア科目の配置をみて、自分自身の学習の方向性を明確にしてください。コース選択はあくまでも皆さんの自発的で自由な意思によって行うものとなっており、各コースの定員などは無く、登録に当たっての選抜試験などは行いません。

A.1 コース制のねらいと意義

人間環境学部は、「持続可能な社会の構築」をめざして、現代の文明を問い直し幅広い知識と知恵で未来を拓くことに貢献する人材を輩出することを目的としています。本学部での学びは、地域の諸課題からはじまって温暖化のような今世紀以降の資源・環境・経済・社会などのさまざまな分野・レベルでの長期的課題への対応と実践へつながっています。「持続可能な社会」であるために必要な「ニューノーマル」（新常態）の切実な希求は、コロナ禍を契機に世界的な潮流となりましたが、その「持続可能な社会」の条件とは何なのか。どのようにすれば社会は持続可能となるのか。めざす社会に少しでも近づけるためには、どのような経路を辿るべきなのか。— これらの命題について、さまざまな場面で議論し明らかにするためには、「つながり」のある幅広い知識をもとに、それぞれの課題の現場をバランスよく「見渡す」ことができる俯瞰力が必要となります。

そのため本学部のカリキュラムは、社会科学を基盤に、自然科学・人文科学を融合させた学際的な構成となっています。つまり、環境を手がかりとして人類の軌跡や現代社会の諸問題について幅広く思考をめぐらしながら文明を問い直し、未来を展望できる力と感性、および持続可能性にかかわる複雑な諸課題に対して様々な立場の社会人として適切な解決手段を構想し実行できる政策能力を育む教育プログラムの構想に沿って、履修科目を設定しています。

しかしながら、多様な学問分野から幅広く学ぶことが、その芯となる考え無しになされるならば、時として「あれもこれも多くの学問分野を学んだが、本当に何を学んだのだろう」ということになりかねません。一体どこに重心がある学習であるのか、たとえば就職活動の際に自己の学びを的確に説明することが出来ないという事態にもなりかねません。

そこで、人間環境学部では学際的な履修を進めていく上での道しるべとなるよう「コース制」を設けています。学部生は、2 年次から 5 つのコースのうち一つを選択し、コース共通科目（10 単位以上）とコースコア科目（20 単位以上）を履修することが求められます（注 1）。なお、コース選択は、あくまでも皆さんの自発的な意思で希望のコースを選べるようになっており、各コースの定員は無く、登録にあたっての選抜試験なども行いません。

つまり、「自分はこのコースでこのようなテーマないし課題を探索して学生生活を送っていくのだ」という自覚を皆さんに持ってもらうための制度です。5 つのコースを設けていますが、各コースそれぞれも幅広いテーマを含んでいます。そしてコース同士が五輪マークのように互いに連関し合っています。2 年生から参加できる「研究会（ゼミ）」を軸として、より明確な学習の道筋を自覚することで、皆さんの履修が有意義で豊かなものとなると確信しています。

以下に各コースの概要を述べます。Ⅱ章と合わせて、コース選択の参考にしてください。もちろん、教員は皆さんのコース選択に関する相談に乗り、アドバイスをします。積極的に声をかけてください。

（注 1）2016 年度以降の入学者に適用されます。履修の手引きの「[専門科目一覧・コース関連科目表 全](#)」を見ながら、履修の決まりに従って選びます。2015 年度以前に入学した学生、および RSP（社会人リフレッシュ・ステージ・プログラム）学生は該当しませんが、コース共通科目とコースコア科目の配置をみて、自分自身の学習の方向性を明確にしてください。

[専門科目一覧・コース関連科目表 全](#)
[を確認する](#)

A.2 コース概要

各コースとも定員はありません。各人は希望に従い以下のいずれかのコースに属します。各コースの内容と学習の方向性は以下のとおりです。

<サステイナブル経済・経営コース>

経済活動と環境保全が調和するグリーンエコノミーの担い手がもとめられる時代です。そこでこのコースでは、持続可能な市場経済に貢献する人材を育成します。経済理論、企業経営の理論と歴史、現代社会における企業の役割について基礎知識を身につけ、その上で、環境配慮型の市場経済と経済政策、先進的な企業の環境経営とCSR（企業の社会的責任）に関する動向に触れながら、企業やその他の事業主体が社会的責任を果たしていくためのマネジメントやビジネスモデル、さらにグリーンエコノミーを支える生活者の消費行動やライフスタイルなどについて探究します。

<ローカル・サステイナビリティコース>

ローカルなフィールド体験をベースに、持続可能な地域社会に貢献する実践的な知と構想力を有する人材を育成するコースです。現代のローカル・サステイナビリティに関するテーマは、廃棄物や公害、自然保護などの環境問題だけではなく、エネルギー、交通、都市計画、農林水産業、福祉など、都市と農山村の地域づくり全般に及び、またローカルな問題とグローバルな問題の関わりも重要です。そこでこのコースでは、これらのテーマについて最新のケースとともに学際的に探究し、さらに市民・自治体・NPO・企業など多様な主体の役割と協働について学び、将来の「グローバル人材」としての自分を展望します。

<グローバル・サステイナビリティコース>

幅広い教養と広い視野を備え、国境を越えた思考で地球規模の持続可能な発展に貢献する「グローバル人材」を育成するコースです。国際社会の動向について基本的な知識を身につけながら、学際的な学びとグローバル体験を通して、気候変動（地球温暖化）や生物多様性、平和、貧困と開発など、グローバル・サステイナビリティに関わる多様なテーマについて探究します。また、地球社会の行方を左右する新興国や途上国の発展と国際協力、先進国日本の役割、さらに政府・NGOなどの市民社会・企業のパートナーシップのありかたについて学び、将来、自らが「グローバル人材」として活躍する場について考えます。

<人間文化コース>

人類が持続可能な社会に向かうためには、様々な針路と実践を模索し選択していかなければなりません。その根幹は、数字では表すことができない価値観、幸福感や死生観といった「人間の意思」です。そこでこのコースでは、「持続可能でグローバルな共創社会」に貢献する「市民」にふさわしい知性と感性を備えた人材を育成します。思想・哲学、歴史学、文学・芸術、民俗学、人類学など人文科学をベースにして人間の軌跡と生きる意味を見つめ直し、さらに学際的な学びを通して、将来の人間や文化（衣食住、技術、学問、芸術、道徳、宗教、政治などの生活形成の様式と内容の総体）の行方について探究します。

<環境サイエンスコース>

サイエンス・マインドを持って持続可能な社会に貢献できる文系の人材を育成するコースです。環境問題の解決のためには、自然環境、災害などの解明や人類に影響を与える科学技術を開発する役割を担う自然科学の専門家、さらに市民をはじめとする利害関係者と対話しながら、多様な利害を調整し、対策について総合的な判断やコンサルティングができる人材が必要です。そこでこのコースでは、社会科学や人文科学とともに、自然—人間—社会のつながりに関する生態学的な思考など、自然科学の基礎教養を通してサイエンス・マインドを身につけ、科学・科学技術と経済・社会・政策の関係性についても探究します。

A.3 「研究会」や講義との関係

とくに研究会 A は特定の関連コースを明示し、コース制指導の要となる場ですから、自分が特に関心が深いコースを示している研究会を参加候補とする、あるいは逆に、自分が最も入りたい研究会と関連するコースを自分の選択コースとする、といった発想が有効です。

なお、人数制限のある授業やフィールドスタディなどは、所属コースを受講者選抜の参考にする場合があります。

A.4 コースの登録

新 2 年生は毎年 1 年次の 1 月頃からコースの登録を行います。詳細は学部ウェブサイトで確認してください。

A) 研究会 A に参加することが確定している場合

所属する研究会 A の担当教員が示すコースを登録してください(複数示されている場合は、自分で 1 つ選んで登録)。所属する研究会 A の関連するコースと、登録するコースは、必ず一致している必要があります。

B) 研究会 B に参加することが確定している場合

自分の選びたいコースが、研究会 B が示すコースと一致していなくとも構いません。関心の深いコースを自分で 1 つ選んで登録してください。

C) 研究会に参加しない場合

B の場合同様、関心の深いコースを自分で 1 つ選んで登録してください。

D) コースの変更

3 年次進級時に限り、コース変更が可能です(登録変更申請は、2 年次の 1 月頃です)。ただし、コース変更により卒業要件にかかるコースコア科目が変更となりますので、注意してください。なお、4 年次進級時のコース変更はいかなる場合も出来ません。

A.5 5 つのコースの関連科目

「[専門科目一覧](#)」に関連するコースが示されているので、皆さんの履修計画に活用してください。また専門的領域を持ち、勉強を深めるために、積極的に教員のアドバイスを求めてください。

[専門科目一覧・コース関連科目表](#)
[を確認する](#)

A.6 コースをこえた学習上の創意工夫

コースに関連した科目区分は 3 つに大別されます。コース共通科目(☆印)は、コースに関係なく履修してほしい科目で 10 単位以上(SS1 生は 8 単位以上)、修得する必要があります。また、コースコア科目(◎印)は各自が選択し所属したコースの中で重要な科目であり、20 単位以上(SS1 は 12 単位以上)の修得が必要です。コース共通科目とコースコア科目だけを履修することで卒業所要単位を揃えることも不可能ではありませんが、自分が所属するコースをこえた学習をするために、コース連環科目(*印)も履修することが望ましいといえます。例えば、自分のメインの専門領域として 1 つのコースに登録してコースコア科目を集中的に学習しながら、サブの専門領域として別のコースのコア科目であるコース連環科目を履修すると、2 つの専門領域を学ぶことができます。一方で、コース共通科目やコースコア科目を履修しながらも、幅広くコース連環科目を履修することで、学際的な学習することも可能です。

B. コース制と履修モデル

「[コース制のねらいと意義](#)」で説明したように、コース制は学際的な学びのための「道しるべ」です。5つのコースごとに（あるいは幾つかのコースに関連して）、**学部の各教員が、学習テーマの具体例を紹介しながら、主にその教員の担当科目を中心に、他にどのような科目も併せて履修していくと有効か、ガイドしたものが「履修モデル」**です（注2）。

コース制は、食事に例えれば「定食」ではなく、「バイキング方式」ともいえる、皆さんの選択の自由度を尊重した、オーダーメードの余地が大きい履修のしくみです。言い換えると、学部の「展開科目」において、20世紀までの学問分野の分類に従って設けている6つの「科目群」のうち、1つの科目群のみを集中的に履修しても、コースの有効な学びにはなりません。（たとえば、2年生から「人間・文化コース」を選んだとします。このコースに関連する科目が、「人文科学関連科目群」に多いことは確かですが、専らこの科目群だけ履修しても、人間環境学部における学際的な学びにはなりません。「シラバスを見ると、自分の興味に合う授業は人文科学関連科目群に多いので、たくさん履修しよう」というプランは構わないのですが、他の科目群からも適度にバランスよく選ぶことが、文学部に入って「人文科学」を学ぶのでは得られない、学際的な稔りになるのです。）

このように、**科目群の枠を越えて履修していき、一見、つながりがないように見えることがらの間にも重要な関連があることを発見・認識し、自分のなかで「一つにつながった」という充実感を得られることが学際的な学びの醍醐味**であり、本学部ならではの収穫になります。

では、どのように科目群を越えて選んでいったらよいのか — 具体的なテーマごとに、栄養バランスのよいバイキング方式の料理メニュー（推奨科目）選択のガイドとして、「履修モデル」を活用して、各自のオーダーメードで学習計画に役立ててください。

（注2）掲載した履修モデルの執筆者の中には、まもなく新任教員と交替する教員もいます。その場合は、新任の教員がアドバイザーになります。また、「研究休暇」等の事情により、その年度に休講となる科目もあります。『履修の手引き』にて「[専門科目の新設・履修上の注意・休講・廃止科目等について](#)」で確認し、履修したいと思う科目が当年度に休講の場合は、次年度以降に履修を計画してください。

B.1 履修モデル一覧

テーマ	担当	関連コース
<u>健康であるために、病気にならないために、今行うこと、考えること</u>	朝比奈	人間文化コース、環境サイエンスコース、ローカル・サステイナビリティコース
<u>比較文化の視点を身につける</u>	板橋	人間文化コース
<u>国際社会の平和と安全、よりよい社会の構築について考える</u>	岡松	グローバル・サステイナビリティコース
<u>「文化的景観」の視点から地域の自然・文化資産を見直す</u>	梶	人間文化コース、ローカルサステイナビリティコース
<u>企業や地域が行っている環境経営の取り組みを学ぶためのポイント</u>	金藤	サステイナブル経済・経営
<u>人間・社会・都市と大気のかかわり</u>	北川	環境サイエンスコース、ローカル・サステイナビリティコース
<u>環境経済論を学ぶ</u> <u>—環境と経済の複雑な関係を考える—</u>	國則	サステイナブル経済・経営コース
<u>国際環境政策を学ぶ</u> <u>—環境税や排出権（量）取引などの経済的手段をどのように理解するか—</u>	國則	サステイナブル経済・経営コース、グローバル・サステイナビリティコース

テーマ	担当	関連コース
<u>自治体環境政策として里地・里山保全を学ぶために</u>	小島	ローカル・サステイナビリティコース、人間文化コース
<u>「誰ひとりとして取り残さない社会」を考える</u>	佐伯	人間文化コース、ローカル・サステイナビリティコース
<u>自然環境と災害</u>	杉戸	環境サイエンスコース、ローカル・サステイナビリティコース
<u>人間のコミュニケーション論について学ぶ</u>	ストックウェル	人間文化コース、ローカル・サステイナビリティコース、グローバル・サステイナビリティコース
<u>人と自然との調和と共生をめざして</u>	高田	ローカル・サステイナビリティコース、グローバル・サステイナビリティコース、環境サイエンスコース
<u>「持続可能性（サステイナビリティ）」の多様性を考える</u>	高橋	各コースに共通するテーマです
<u>発展途上国の貧困と環境問題を考える</u>	武貞	グローバル・サステイナビリティコース、ローカル・サステイナビリティコース
<u>文化や社会のありようとあるべき姿を哲学的・思想的に考える</u>	竹本	人間文化コース、グローバル・サステイナビリティコース、ローカル・サステイナビリティコース
<u>歴史学とサステイナビリティ</u>	辻	人間文化コース、ローカル・サステイナビリティコース
<u>環境法</u>	永野	ローカル・サステイナビリティコース、サステイナブル経済・経営コース、グローバル・サステイナビリティコース
<u>卒業後の仕事、労働環境について考える</u>	長峰	サステイナブル経済・経営コース、ローカル・サステイナビリティコース
<u>日本環境史を学ぶために</u>	根崎	ローカル・サステイナビリティコース、人間文化コース
<u>企業と社会のサステイナビリティ（持続可能性）を学ぶために</u>	長谷川	サステイナブル経済経営コース、ローカルサステイナビリティコース、グローバルサステイナビリティコース
<u>中国の環境問題について考える</u>	日原	人間文化コース、グローバル・サステイナビリティコース
<u>地域の文化を考える</u>	平野井	人間文化コース
<u>エネルギー</u>	藤倉	グローバル・サステイナビリティコース、環境サイエンスコース
<u>環境工学の基礎</u>	藤倉	ローカル・サステイナビリティコース、環境サイエンスコース
<u>地球温暖化とその周辺を学ぶ</u>	松本	環境サイエンスコース
<u>持続可能な健康を目指すために</u>	宮川	環境サイエンスコース、ローカル・サステイナビリティコース
<u>新たな価値創造が求められる時代における「地域」を学ぶために</u>	湯澤	ローカル・サステイナビリティコース
<u>環境問題に倫理学の視点から取り組む</u>	吉永	人間文化コース、ローカル・サステイナビリティコース
<u>文系の立場から科学技術のありかたと政策を考える</u>	渡邊	環境サイエンスコース

B.2 履修モデル

履修モデル作成者：朝比奈 茂

テーマ：健康であるために、病気にならないために、今行うこと、考えること

関連の深いコース：人間文化コース、環境サイエンスコース、ローカル・サステイナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

近年、医療施設や薬局、SNSや健康雑誌などで「セルフメディケーション」といった言葉が目にとまります。「セルフメディケーション」とはどのような概念があるのでしょうか？

現代の医療水準は先進国において日々高度化、細分化しております。私たちは身体の不具合を感じるとその症状に応じて、皮膚に関するものであれば皮膚科、目に関するものであれば眼科、風邪症状などであれば内科、腰や膝が痛いのであれば整形外科と、症状がでた部位によって診療科を受診し、医師の診察をうけ薬を処方されるでしょう。

このように普段から違和感なく行っている、医療機関への関わり方ではありますが、少しだけ考えてみて下さい。どうしてそのような「症状」があらわれたのでしょうか。どうして「痛み」がでてきたのでしょうか。

「症状」や「痛み」は身体がはっするサインであると考えることができます。つまり何らかの刺激（物理的、化学的、生理的、生物的、精神的）が、身体に作用すると、「症状」や「痛み」がでてきます。加えられた刺激の種類、量、質などによってその症状や痛みに差異が生じます。例えば体が疲れている、もしくは負担が掛かっている場合、だるさや重さ、ねむけ、痛みやしびれなどの症状がよくあらわれます。

人間の身体は矛盾なく理にかなっております。偏った食事をしつづければ、皮膚や髪の毛、爪などに変化があらわれます。仕事や人間関係でストレスを抱えると、全身症状や呼吸に変化があらわれます。また、細菌やウイルスなどが身体に侵入すると、咳や熱をだして追い払おうとします。花粉やほこりが多く浮遊している場合、くしゃみや涙、鼻水をだして体外へ排出します。また肩のこり、目の疲れといった症状は、姿勢がわるい、静止しすぎ、パソコンの使いすぎといった内容を示唆しています。これらの症状はすべて自らがはっするサインです。早めに改善することを警告してくれています。しかし、多くのひとはせつかく身体が教えてくれているのにも関わらず、その症状や痛みの意味に気が付かず、病院やクリニックにかけこみます。持続可能な医療や福祉を考えるなら、まず人間について考える必要があります。私たち人間は何千年、何万年もずっと種をつないできております。どうして、そのようなことが出来たのでしょうか。それには人体に備わっている一つの大事な機能があるからです。「ホメオスタシス（恒常性）」という機能です。ホメオスタシスが備わっているからこそ、何らかの刺激が身体に加わり、それにより細胞が傷ついたり、死滅したりして内部環境のバランスが崩れても、無意識にもと通り（治癒する）になります。

人体について、すこし考えてみましょう。物質的な「肉体」は近年の医科学の発展により、遺伝子レベルまでほぼ解明されてきた一方で、非物質的な「精神」はまだまだ分からないことが沢山あります。人間は、物質的な「肉体」と非物質的な「精神」により成り立っているため、両者が上手にバランスを保つことで、病気になりにくくなります。したがって、非物質的な「精神」について、今後さまざまな角度から解明が進むことが期待されます。

人体の健康は、周りを取り巻く環境に大きく左右されます。私たちは、その環境を選ぶこともできるし、変えることもできます。「人間がいて環境がある」のか「環境があって人間がいる」のか。これらを念頭に行動し、普段から環境や健康について意識することで、「**自分の健康は自分で管理できる（セルフメディケーションの概念）**」ようになることが期待されます。私たちは今、まさに自らの健康を自らの手で守らなければならない時代に突入しています。そのためには、まず人間を理解し、文化を理解し、環境を理解する。その様な全体的な思考を身につけることで、先にあげたテーマである「健康であるために、病気にならないために」を達成することができるでしょう。

2. テーマに関連した推奨科目

環境健康論ⅠⅡ、自然環境科学の基礎、自然環境論Ⅰ～Ⅳ、環境科学Ⅰ～Ⅲ、衛生・公衆衛生学Ⅰ～Ⅲ、食と農の環境学Ⅰ～Ⅲ、環境教育論、人間環境セミナーなど

テーマ： 比較文化の視点を身につける

関連の深いコース： 人間文化コース

1. このテーマを学ぶために

昨今世界の諸地域の人々と連携してさまざまなグローバルな課題に取り組むことが求められる中、皆さんも将来、多様な考え方や文化の人々と協調性を保ったり、交渉したりする必要性が生じるでしょう。その際、大学で、物の見方はひとつとは限らずさまざまな見方ができることに気づき、多様な考え方を理解する姿勢を身につけることができれば、それが大きな力になると考えます。そうした力を身につけるひとつの方法として、比較文化の視点を身につけることを提案します。

人は、他文化に触れることで、自文化の中で自明だと思っていたことが実はそうではないことに気づき、自文化をより深く知ることになります。そうして自分が他文化を見る際に依拠している文化を自覚することによって、他文化をよりよく知ようになる、というように、異文化理解の作業には、文化比較の往復運動がくり返されていきます。人は各自、何らかの文化の中で個を育み存在する以上、ある文化を、どんな特定の文化にも依拠しないニュートラルな視点から分析することはできませんが、上記のような文化比較の作業をくり返すことで、徐々にその文化への理解を深めていくことはできるでしょう。しかし、異文化理解の歴史を見ると、文化比較の作業にはその時々の世界の諸地域の支配・被支配の関係が分かち難く結びつき、そうした関係を強化するために文化比較の作業が利用されてきた事例は、枚挙にいとまがないことがわかります。それは、表向きは植民地支配がほとんど無くなった今日の世界でも、実はさまざまな形をとって続いているのです。比較文化研究は、そのような文化比較の落とし穴を明らかに出すことで、文化比較の仕方そのものを自己批判的にとらえ続けることも行います。

たとえば、私が担当する「西洋美術史論」では、19世紀半ば以降「西洋」の人々（この場合特に「イギリス」）が「日本」の文化をどのように見てきたのかを追っていくことで、（皆さんの多くにとっては）自文化である「日本」の文化を新たな視点から捉え直すと同時に、当時「日本」の文化を評していた人々が依拠していたところの文化である「イギリス」の文化について学ぶという文化比較の往復運動を実践します。また、実は当時、「イギリス」も「日本」も先に述べたような文化比較の落とし穴におちいっていたことを見ていくことで、文化比較の仕方そのものを批判的にとらえる姿勢も身につけることをめざします。

この授業はほんの一例で、本学部には「日本」の中の様々な文化やその他世界の多様な文化について学べる授業が用意されていますので、それらの授業を通して、自文化と他文化について、さまざまな角度から理解する姿勢を身につけていくことができます。また、英語やその他外国語能力を身につけることは、皆さんが今後活躍する世界を広げてくれるだけでなく、自文化や他文化への理解も深める一助となるので、ぜひ頑張ってもらえればと思います。

2. テーマに関連した推奨科目

西洋美術史論、研究会 A「美術・デザインと持続可能な社会」、グローバル・コミュニケーション、比較演劇論Ⅰ・Ⅱ、日本詩歌の伝統、日本美術史論、現代思想と人間Ⅰ・Ⅱ、仏教思想、西欧近代批判の思想、英語、その他外国語

履修モデル作成者：岡松 暁子

テーマ：国際社会の平和と安全、よりよい社会の構築について考える

関連の深いコース：グローバル・サステナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

我々の住むこの地球には、現在、200 近い国家と地域があります。これらの国家間の関係により成り立っているのが、「国際社会」です。そこでは有史以来、様々な紛争が繰り返され、その反省から平和を構築・維持する制度が模索されてきました。また、現代においては、国家間関係（国際関係）の活発化による紛争の多様化、科学技術の発達による戦争や環境問題の規模の拡大・損害の不可逆性、民族自決や人権のような人々の価値観の変容による新しい問題の出現などに対応する必要が生じ、従前の「戦争」（＝武力紛争）の反対の意味での「平和」のみならず、「よりよい社会」の実現という意味での平和を目指す必要が出てきました。

このような国際社会の諸問題を学ぶにあたっては、まずは**国際関係論**を履修し、歴史や国際政治の概論を把握することを勧めます。国際社会の諸問題を解決し、国際社会の秩序を維持する方法として、国際社会の法的枠組みという観点から考察するのであれば、国際法を研究するとよいでしょう。国際法とは国家間での合意・取極めのことです。国際法は国内法とは異なる概念をも有しますが、基本的な**法学**の知識があるとよいと思います。国際法の国内実施は憲法を介して行われますので、**日本国憲法**も重要です。その上で、**国際法Ⅰ**（総論）で、国際法とは何か、国家間関係の仕組みはどのようになっているのかを学ぶとよいでしょう。そして、個別の分野、たとえば海洋や宇宙における国際制度、人権問題、安全保障、国際裁判などについては、**国際法Ⅱ**（各論）で、国際環境問題については、**国際環境法**で学べます。その他、**国際政治科目**や**世界史科目**も履修すると、より理解が深まります。

また、国際社会は主権国家が共存している社会であり、国際協力をするにあたっては、各国の国内事情を考慮しながら取極めを結ばなくてはなりません。したがって、日本の国内法、行政の仕組みや、各国の環境法も重要です。

国際社会について学ぶためには国内社会、とりわけ自分の国のことを知る必要があります。常に自国と他国との関係を意識し、自国の国益を考えながら、国際社会、さらには地球規模の問題に取り組んでいくことが大切です。

2. テーマに関連した推奨科目

国際関係論、国際法Ⅰ、国際法Ⅱ、国際環境法、日本国憲法 等

履修モデル作成者：梶 裕史

テーマ：「文化的景観」の視点から地域の自然・文化資産を見直す

関連の深いコース：人間文化コース、ローカルサステイナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

私は、本来の専門である民俗学的視点をもとに、地域の伝統文化資産が、エコな地域づくりや人間形成に役立つ可能性を考える授業・ゼミを持っています。民俗学は**民間伝承**（地域のごくふつうの人々の暮らしによって集団的に形作られ、時代を超えて伝えられてきた暮らしぶりや心の持ち方）を研究対象とします。この民間伝承が素材となる場合が多く、かつ環境というテーマと密接に関わる考え方に「文化的景観」という概念があります。

文化的景観は、簡単にいえば、単なる視覚的な眺めにとどまらず、その眺めを成り立たせている**地域の暮らしぶりにかかわる文化資産**（人手の加わった「自然」も含む）を、**持続可能性**の観点から価値づける概念です。例えば日本の**里山・里海**（**自然と人間の共同作品**としての生活環境）や、**鎮守の森**（宗教的な聖地として自然が守られてきた場所）などは好例です。**歴史的なまちなみ**も範囲に入ります。有形物だけでなく、**無形の資産**（生活技術・習俗、伝統行事、昔話・伝説、方言、アイデンティティーに関わる集団的な心意など）、また視覚にとどまらず音、匂い、触感、食など「**五感**」の素材も、文化的景観の構成要素と考えることができます。

「遺産」という語を使わず「資産」と記すのは、過去に形づくられた、保存すべき宝物というだけではなく、今後それをベースにして、新たに**エコな生活文化を創造していける可能性をもつ素材**、という含みも持つためです。伝統文化に由来する地域の個性を活かした、さまざまな新しい試みが各地で行われています。それらの多くは、**エコツーリズム**、**グリーンツーリズム**、**エコミュージアム**等の用語で括ることができます。「場」の個性と結びついた**アート**による地域づくりや、**映画・アニメ**による地域振興の試みなどもその例に入ります。こうした近年の潮流は、「文化的景観」を活かそうとする活動の試みである、と広くまとめることができますでしょう。

仮に、この「文化的景観」をテーマにしている私のゼミに参加することを想定した履修モデルを示してみると、コアになるのは**環境表象論ⅠⅡ**です。私の立場は「実学」（＝具体的に政策を立案する）ではなく、素材の価値を考察するところにあるので、実践的な地域形成について学ぶためには、2. に示す他の科目例のうち、社会・地域関連の科目や、地方自治・自然保護の基礎が学べる科目で素養を持つことが望まれます。協働による地域形成活動というより、エコな地域づくりの土台となる個々の「人間形成」、共生志向のライフスタイル（ロハス）に興味・関心がある人には、環境というテーマに人文科学の視点からとりくむ授業が有益であると思います。

2. テーマに関連した推奨科目

環境表象論ⅠⅡ	地域形成論	地域経済論ⅠⅡ	地域コモンズ論
都市環境論ⅠⅡ	NPO・ボランティア論	フィールド調査論	環境社会論ⅠⅢⅢ
市民社会と政治	自治体環境政策論ⅠⅡ	自然環境論Ⅳ	自然環境政策論ⅠⅡ
環境倫理学ⅠⅡ	仏教思想	西欧近代批判の思想	応用倫理学
日本環境史論ⅠⅡ	ヨーロッパ環境史論ⅠⅡ	環境人類学ⅠⅢⅢ	比較演劇論ⅠⅡ
日本詩歌の伝統	食と農の環境学ⅠⅢⅢ	環境教育論	アーティストと社会貢献

テーマ： 企業や地域が行っている環境経営の取り組みを学ぶためのポイント

関連の深いコース： サステイナブル経済・経営コース

1. このテーマを学ぶために

従来の企業（製造業や非製造業）の取り組みとは、顧客・消費者のニーズに応じた商品やサービスを提供し、業績（儲け）を上げていくために、継続的に運営し、管理するといった経営活動が中心でした。しかし、1990年代から、国内外で地球環境問題の関心が高まり、また、それによって法規制の整備や政策の策定・実施がなされたことから、企業は、環境影響に配慮した経営活動である環境経営も、現在あるいは将来における業績を左右する重要な取り組みとして位置付けてきました。これ以降、各企業は、国内外における地球環境問題に関する政策的な動きや経営的な取り組みに注目しながら、環境経営を積極的に行っています。

そこで、企業における環境経営の取り組みを理解していくためには、まず、**経営学入門、環境経営と会計、現代企業論**を履修し、これら3つの講義の中で、企業が、どのような方針を設定し、この方針に基づいてどのような組織を作り、どのような運営・管理を行っているのか、という経営手法の基礎基本を学習していくことが必要です。これらの基幹科目を学習した後に、**環境経営論Ⅰ**を履修することにより、環境経営の目的、意義、手法等を理解できるだけでなく、各企業で行われている環境経営を自分自身で多面的に分析・評価できる能力も身につけることができます。

以上の講義を基礎にして、**環境マネジメントスタディーズⅠ・Ⅱ**や**環境ビジネス論**を履修すれば、環境経営の実践的な取り組みをより深く理解することができます。また、**CSR論Ⅰ・Ⅱ**では、環境経営での管理対象とされる経済面や環境面に、雇用関係や人権等の社会面を加味した企業による取り組みの起源や現状を学習することができます。

さらに、企業が現在または将来において実施すべき新たな環境経営や、企業と国や自治体による地球環境問題や社会問題に対するさまざまな取り組みとの関係を理解していくためには、**環境経営論Ⅱ、環境経済論Ⅰ・Ⅱ、国際環境政策Ⅰ・Ⅱ、各種環境法、自治体環境政策論Ⅰ・Ⅱ、地球環境政治論、エネルギー政策論、地域形成論、地域経済論Ⅰ・Ⅱ、都市環境論Ⅰ・Ⅱ、環境社会論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、環境教育論**を履修してください。

2. テーマに関連した推奨科目

①基幹科目

経営学入門、環境経営と会計、現代企業論

②政策科目

- 1) 経済・経営：環境経営論Ⅰ・Ⅱ、環境マネジメントスタディーズⅠ・Ⅱ、環境ビジネス論、CSR論Ⅰ・Ⅱ、環境経済論Ⅰ・Ⅱ、国際環境政策Ⅰ・Ⅱ
- 2) 法律・政治：各種環境法、自治体環境政策論Ⅰ・Ⅱ、地球環境政治論、エネルギー政策論
- 3) 社会・地域：地域形成論、地域経済論Ⅰ・Ⅱ、都市環境論Ⅰ・Ⅱ、環境社会論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
- 4) 環境総合：環境教育論

テーマ：人間・社会・都市と大気のかかわり

関連の深いコース：環境サイエンスコース、ローカル・サステイナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

大気の動き方は地球全体にわたる大スケールの変動から、私たちの身の回りで発生するような小さなスケールのものまで豊かな表情をもっています。私たちが大気の動きを意識するのは、一つは心地よいと感じるときでしょう。たとえば、森や林を抜けてきた新鮮な風や夏の夕方に吹く涼風など、大気そのものの清々しさを直接感じるときです。同時に、風が駆け抜けるときのサラサラとした音や風鈴が奏でる音を聞いたときの聴覚的な快適さ、窓のカーテンが風でそよぐのを見たときの穏やかさや、鯉のぼりが泳ぐ風景を見たときに感じる伸びやかさなどの視覚的な快適さもあります。また、大気は水とならんで地形や景観を作るので、これらも視覚的な快適さの一種です。さらに、ファンによって茶畑を霜害から防ぐなどの農産安定化、あるいは風力エネルギーによる作業や発電など、人は大気を巧みに利用しており、これらは間接的な快適さと言えるでしょう。

大気の動きを意識するもう一つのケースは、逆に、不快や危険を感じるときです。冬の夜に北風の中を歩いていると体熱が奪われ、皮膚温度が下がって早く家に帰りたいと思いますし、肌は乾燥します。また、強風で破壊された看板が飛来してケガをしたり、高速道路で自動車を運転中に強い横風を受けてハンドルをとられてパニックに陥り、事故に至ることもあります。ビル風などは訴訟になったこともあります。さらに、大気は汚染物質や病原菌を輸送したり、都市のヒートアイランド現象の媒体となったり、台風や竜巻のような恐ろしい姿となって人や街、交通・物流、農作物に牙をむきます。

以上のように人の生活は大気と密接な関係があり、古来より人は、あるときは大気を利用する方法を考え、あるときは災害や公害という形で叩きのめされては立ち上がり、またあるときは、その脅威から自らを守ったり損害を軽減する技術を考えて法律にも反映させてきました。大気と人との付き合い方は国や地域によっても異なり、昔から変わらないものもあれば時代の変化に応じて変わってきたものもあり、多種多様です。さらに、地球規模から都市・地域規模にいたるまで、大気は環境問題の中心的位置づけにあります。大気の動きと人との関わりを知り、考えてゆくことは基礎的かつ分野横断型のテーマと言えるでしょう。

2. テーマに関連した推奨科目

大気と社会Ⅰ・Ⅱ	環境法Ⅰ～Ⅲ	都市環境論Ⅰ・Ⅱ	自然環境論Ⅰ
エネルギー論Ⅱ	環境科学Ⅰ・Ⅱ	環境管理論Ⅱ	自然災害論
気候変動論Ⅰ・Ⅱ			

履修モデル作成者： 國則 守生

テーマ： 環境経済論を学ぶ

—環境と経済の複雑な関係を考える—

関連の深いコース： サステイナブル経済・経営コース

1. このテーマの目的

今世紀の最重要な課題の1つに、地球環境問題に対してどのように対処していけばよいのかという課題がある。深刻化しつつあるこの問題は全ていろいろなレベルの経済活動に沿って発生しており、その対策を考えるためには経済自体の仕組みとそこでのさまざまな経済主体の行動・影響と環境問題の関係を理解することが不可欠である。

そのために財・サービスの「選択」と「交換」の機能を果たす市場の働きとその限界を理解することに加えて、市場を取り巻く環境を含む自然資本、インフラストラクチャー、制度資本などのさまざまな社会的共通資本の役割を理解することも重要である。

とりわけ、環境問題はどのようにして通常の市場経済のなかでは上手く取り扱うことができないのか、その問題を克服するためにはどのような対応が制度面を含めて必要なのか、といった問いに答えるための基本的理解がきわめて重要であり、その理解を前提に、望ましい対応や政策が選択され、またそれらの評価が行われなければならない。現実にある多様な環境問題を反映して、その対応・政策もじつにバラエティに富んでいるが、対応・政策間での得意、不得意な点を経済のなかで体系的に理解し、現実に応用していくことが求められている。

また、さまざまな形で存在する自然資源・自然資本の安定的な利用に関しても、大きく分けて市場の枠内で対処する方法と組織内で対処する方法の2つの方法があり、それぞれの方法の中で長期的な観点からサステイナブルな形で利用するための条件を吟味することが重要な課題となる。

たとえば、組織的な対応の著名な例として世界各地に歴史的に存在してきたさまざまな形態のローカル・コモンズ（local commons）があるが、対象とする自然資源などの資源利用がいかんして持続可能な形態となって存在して来たのか、また今後それらのローカル・コモンズを安定的に維持して行くにはどのような視点や制度改革が必要なのかなどを探ることは興味ある課題の1つである。

2. テーマに関連した推奨科目

環境経済論Ⅰ・Ⅱを学ぶためには「展開科目」のなかで社会科学分野を中心に幅広く学び、総合的な理解を得てほしい。とくに関連している科目としては、**ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ**、**マクロ経済学Ⅰ・Ⅱ**、**公共経済学**（以上は基幹科目）、**環境経営論Ⅰ・Ⅱ**（政策科目）などのサステイナブル経済・経営にかかわる専門科目がある。コモンズに関しては**地域コモンズ論**（政策科目）とも関連している。

履修モデル作成者： 國則 守生

テーマ： 国際環境政策を学ぶ

—環境税や排出権（量）取引などの経済的手段をどのように理解するか—

関連の深いコース： サステイナブル経済・経営コース、
グローバル・サステイナビリティコース

1. このテーマの目的

環境政策の範囲はきわめて広い。地球規模で対処しなければならない政策から、国内や一地方で中央政府・地方政府が行う政策、企業や NGO・NPO あるいは個人が自主的に行う対応まできわめて幅広いスペクトラムがあり、それらのなかで有効的な政策を選択的あるいは重層的に動員して効果をあげなければならない。

そのように多様な環境政策のなかで、先進諸国では、1970 年代までは命令規制型（command and control）と呼ばれる直接規制が各国とも主流を占めていた。しかし、1980 年代に入って、間接規制としての経済的手段（economic instruments）と呼ばれる政策手段が現実採用されるようになり、1990 年代に入ってヨーロッパを中心としてその流れが定着し、拡がりを見せつつある。

この環境保全のための経済的手段は、その原因物質の排出量に応じて汚染物質排出者に対して経済的な負担が生じるような仕組み・制度を作り、汚染物質排出者の経済的動機に訴えて排出量の抑制・削減を誘導する方法である。そして経済的手段の代表例として環境税と排出権（量）取引があるが、これらの手段は従来の命令規制型手段と比較してどのように違うのか、また両経済的手段の異同は何なのかといった視点は重要である。

またこれらの経済的手段が各国でどのように導入されているのかを概観すると、ヨーロッパ等と比較してわが国の場合、経済的手段の定着に多くの時間を要しているが、いずれは時間をかけて本格的に導入されて行くことが期待されている。その際、政策手段間での特徴について、定性的な議論だけでなく、定量的にもその効果を分析し、どのような政策をとるべきかを議論しなければならない。

さらに、環境問題をより広い視野でみると、地球規模でいかに効果的な対策を採用していくかという問題にも関連している。そこでは地球環境問題に対する国家間で締結される国際環境協定のなかで、どのような経済的手段を効果的に織り込んでいくのかが問われている。

2. テーマに関連した推奨科目

環境の経済的手段を深く学ぶためには、**国際環境政策 I・II**（政策科目）を履修すること。またその基礎として**環境経済論 I・II**（政策科目）を事前あるいは少なくとも同時に学ぶことが推奨される。これらと関連して、自主的な行動を中心として企業の対応を学ぶためには**環境経営論 I・II**、**CSR 論 I・II**、**環境経営と会計**、**環境ビジネス論**（以上、全て政策科目）などがある。また国際的な観点からは、**途上国経済論 I・II**、**国際経済協力論 I・II**、**国際環境法**（以上、全て政策科目）などがある。

テーマ：自治体環境政策として里地・里山保全を学ぶために

関連の深いコース：ローカル・サステナビリティコース、人間文化コース

1. このテーマを学ぶために

自治体の環境政策において里地・里山保全というテーマがクローズ・アップされています。都市では残された貴重な緑を保全し、農村では伝統的な村落景観を継承していくことなどが主な政策目的といえるでしょう。このテーマを学ぶにあたって、まず「地方自治論」、「自治体環境政策論ⅠⅡ」による地方自治の基礎知識と自治体の環境政策に対する理解が不可欠です。また里地・里山保全は、都市であれ農村であれ、地域環境の重要な構成要素として、広い意味でのまちづくりの中で考えていかなければなりません。そこで「地域形成論」、「地域経済論」、「都市環境論ⅠⅡ」、「自然環境政策論ⅠⅡ」、「地域コモンズ論」、「環境教育論」などで現代のまちづくりに関する基礎知識や考え方を学ぶ必要があります。

自治体の環境政策としての進め方についてはいくつかのアプローチがあります。たとえば法律や条例などの法的手段を理解するためには、「行政法の基礎」や「環境法ⅠⅢ」の知識が必要になるでしょう。さらに都市の里地・里山の多くは、開発のために売買の対象となる私有地です。したがって法律に関する科目では、「憲法の基礎」、「民事法ⅠⅡ」も基礎知識として身につけてほしいと思います。なお環境政策としては法的手段だけではなく経済的手段というアプローチもあります。あるいは里地・里山を守ることにについてはその価値を経済的に測定することが必要な場合があります。この点では「環境経済論ⅠⅡ」が示唆を与えてくれると思います。

誰が里地・里山を守るのかということというと、自治体が政策的に保全していくことはもちろんですが、地域住民や環境NPOの存在も重要です。こうした環境政策における地域の力については、「NPO・ボランティア論」、「市民社会と政治」、「環境社会論ⅠⅡⅢ」の履修で理解が深まると思います。

ところで、里地・里山保全が自治体の重要な政策課題になったのは、それが失われつつあるからです。なぜそうした事態に至ったのかといえは、戦後の高度経済成長の過程で地域社会が変貌し、里山の価値に対する認識が低下してきたからです。そうした社会の変化については、「現代社会論ⅠⅡⅢ」で理解を深めてください。また里地・里山を保全していくためには、それがかつて地域社会でどのような意味をもっていたのかということのを再認識する必要があります。里地・里山の歴史的・文化的価値を再認識するためのヒントは、「日本環境史論ⅠⅡ」や「環境表象論ⅠⅡ」にあると思いますし、「環境哲学基礎論」、「環境倫理学」は保全ということに関する思想的そして根元的な問いを考えるにあたって有益でしょう。

最後に、里地・里山は、地域の水環境ともつながり、また生物多様性に富んだエリアであるといわれています。したがってこの政策は、地域の自然保護であると同時に間接的には地球環境の保全にもつながっていきます。これらのことに関しては、「サイエンスカフェⅢ」、「自然環境論ⅠⅡⅢ」、「自然環境政策論ⅠⅡ」、「環境人類学ⅠⅡ」などで基礎知識を学んでください。

2. テーマに関連した推奨科目

地方自治論、自治体環境政策論ⅠⅡ、憲法の基礎、行政法の基礎、環境法ⅠⅢ、民事法ⅠⅡ、環境経済論ⅠⅡ、NPO・ボランティア論、市民社会と政治、環境社会論ⅠⅡⅢ、地域形成論、地域経済論、都市環境論ⅠⅡ、地域コモンズ論、環境教育論、現代社会論ⅠⅡⅢ、日本環境史論ⅠⅡ、環境表象論ⅠⅡ、環境哲学基礎論、環境倫理学、サイエンスカフェⅢ、自然環境論ⅠⅡⅢ、自然環境政策論ⅠⅡ、環境人類学ⅠⅡ

テーマ：「誰ひとりとして取り残さない社会」を考える

関連の深いコース： 人間文化コース、ローカル・サステイナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

持続可能な社会の構築のためには、「誰一人として取り残さない」ということが重要だと言われますが、誰一人として取り残さない社会とは一体どのようなもののでしょうか。このような観点から考えた時、私たちの社会はそれをどの程度達成することができており、どのような問題や課題を抱えていて、どのような解決策が必要とされているのでしょうか。

これらの問いに答えるためには、まず①これまでの知識の蓄積や議論を学ぶことと、②今何が起きているのかを知るためにデータや分析を検討することが必要です。更に、③調査の方法を学び、情報や知識がどのように作られているかを知りましょう。これによって研究やメディア等での議論に対してクリティカルに向き合い、自分自身でも研究を行うことができるようになるからです。そして、④自分でテーマを決めて問いを立て、調査や分析を行ってみましょう。知識を生産し、解決策を提示することができます。

①のためには、**現代社会論Ⅰ**や**現代思想と人間Ⅰ,Ⅱ**で社会・人文科学で使われる理論や概念、思想を学び、思考の枠組みを手に入れましょう。

②に関しては、自分がどのような問題に特に興味があるのかを考え、それに合致する科目を見つけましょう。特に多様性や格差、人権の問題を扱う科目を選んでみると良いでしょう。**現代社会論Ⅱ**ではジェンダーとセクシュアリティについて学び議論していますし、**現代社会論Ⅲ**では身体と医療の社会学という観点から、経済的格差や人種、障がいについても考えます。国際的な枠組みで考えたい人は**途上国経済論Ⅰ,Ⅱ**も良いでしょう。また、多様な背景や価値観を持つ人々が尊重されながら共生するためには、相互理解とコミュニケーションが必要になります。この部分について学びたい人は、**グローバル・コミュニケーション**も検討してみましょう。

③のためには、**フィールド調査論**や**社会統計論**で知識やスキルを身につけることができます。調査の方法論を中心に据えた**研究会**もあります。

④に関しては、**研究会**に所属して取り組むこともできますし、いろいろな科目の課題の中で考えることもできるでしょう。個人で論文を書くことも可能です。

2. テーマに関連した推奨科目

現代社会論Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ, 現代思想と人間Ⅰ,Ⅱ, 途上国経済論Ⅰ,Ⅱ, グローバル・コミュニケーション, フィールド調査論, 社会統計論, 研究会

テーマ： 自然環境と災害

関連の深いコース： 環境サイエンスコース、ローカル・サステイナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

地形や気候などの自然環境は、われわれのライフスタイルや「豊かさ」に大きく影響しています。日々の生活や社会活動、文化的営みが意識の中心を占め、自然環境は「水や空気のように」あたりまえの存在（＝意識しない）、という方もいるかもしれません。しかし、生活や文化、社会は、その土地のもつ自然的個性をベースとして成立しています。この点への理解なしに、持続可能な社会の実現は不可能です。

自然環境はわたしたちに多くの恵みを与えています。一方で、自然環境のもつ力によって、日常の営みが急に途切れることもあります。たとえば大地震など、突発的なハザードの時です。突発的ではなく徐々に進行するハザードもあります。このように恩恵と災害をもたらすダイナミックな自然環境のなかで「豊かに生きる」とは、いったいどういうことでしょうか。

「豊かさ」の評価は定性的にも定量的にも容易ではありません。しかし、個人に注目する際には「QOL」などの概念が提案されており、社会全体を考える場合も「持続可能性」という、次世代を見据えて現代社会のあり方を考える概念が提唱されています。そして、こうした「豊かさ」を支える鍵は、自然科学のみでなく、社会・地域、人文科学、法律・政治、経済・経営など多岐の分野にわたります。しかしながらあらためて強調したいのは、生活や文化、社会が、地形環境や気候環境など「土地の自然的個性」に裏打ちされて成立しているという事実です。重要なのは自然環境への理解を深め、そのうえで社会活動を営んでいくスタンスではないでしょうか。

災害に対する日常の取り組みも、決してマイナスを埋める作業ではありません。自然環境への理解に立脚して「もしも」に備える歩みは、個人のQOLあるいは社会の持続可能性を担保し「豊かさ」を下支えする前向きな取り組みのひとつとして位置づけられます。すなわち、恩恵を享受し、災害で一網打尽にならない地域社会を、ハード・ソフト両者の長所短所と相補的役割、また時空間スケールや担い手を意識しながら、さまざまな価値観に目配りしつつ構築していく、ということです。

その意味でも、分布を把握し比較を行いながら地域的差異とその要因、歴史的変遷を理解し、分析的かつ俯瞰的な視野から物事を考えていく地理学的視点に立脚して、自然環境と災害について地域性と長期的視野を大切にしながら学びを深める意義はきわめて大きいと考えています。

2. テーマに関連した推奨科目

自然科学関連では、自然環境論、自然災害論、気候変動論、環境科学、自然環境政策論など、また社会・地域関連では、地域経済論、都市環境論、環境社会学、地域コモンズ論、災害政策論、科学技術社会論、フィールド調査論などでしょうか。日本環境史論や環境人類学、環境表象論、環境倫理学、エネルギー政策論など、人文科学や法律・政治、経済・経営関連の科目も多角的視点から考える礎になります。講義や演習など教室内での学びに加え、現場での学習や発見も大切にいただければと思います。

履修モデル作成者：ストックウェル エスター

テーマ：人間のコミュニケーション論について学ぶ

関連の深いコース：人間文化コース、ローカル・サステイナビリティコース、
グローバル・サステイナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

コミュニケーションは人間と人間との間の基本的な問題を含みます。従って、コミュニケーションという分野は人間に関するすべての科目の基盤と言えるでしょう。

コミュニケーションは、人間関係の中心に位置するものです。家族関係、交友関係、上下関係などといったどのような人間関係を持つとしても、コミュニケーションは欠かせないのです。この世の中に暮らす限りは、ほとんどの人は何らかの形でコミュニケーションを取らないと生きていけないのです。コミュニケーション論を学ぶことによって、コミュニケーションの複雑さが見えてきます。これに伴って、自分が周りの人をどう見ているのかを理解できるようになるが、それだけでなく、周りの人が自分をどう見ているのかと、自分が自分をどう見ているのかをわかるようにもなるのです。性別、文化、年齢、宗教などの要素はコミュニケーションに影響を与えます。この要素を研究することにあたって、なぜコミュニケーションの問題が出てくるかとその解決方法を理解できるようになります。これに加わって、批判的思考力、問題解決力、決断力、チームワーク、メディア・リテラシーなどといったスキルも習得できます。

コミュニケーションに関連している科目に関しては、個人・社会・新テクノロジーの観点から見た人間の全般的なコミュニケーションに興味のある方は、「研究会：Human Communication」を履修すると良いのです。「グローバル・コミュニケーション」という科目は、異文化や他国に関するコミュニケーションの理解に繋がります。この科目では、パーソナルとソーシャルなどのローカルなコミュニケーション・スキルとともに、国際・多文化などのグローバルなコミュニケーション・スキルを学ぶので、国内だけでなく、国際的に活躍できるようになります。マスコミに関心があれば、「研究会：Mass Media and Research」はオススメです。この科目では、日常生活に関わるマスメディアの影響を研究していきます。

2. テーマに関連した推奨科目

研究会「Human Communication」

研究会「Mass Media and Research」

展開科目「グローバル・コミュニケーション」

テーマ：人と自然との調和と共生をめざして

関連の深いコース：ローカル・サステイナビリティコース、グローバル・サステイナビリティコース、環境サイエンスコース

1. このテーマを学ぶために

人は自然環境に対してこれまで多くの影響を及ぼし、今この時も与え続けています。人類の幸福のためには仕方がない、という考えがある一方、自然災害や感染症、食料や水不足など、手痛いしっぺ返しをしばしば自然から受けているのも事実です。果たして一方的に自然を利用し、資源を収奪し続けることでこの先、持続的な経済活動や社会を築いていけるのだろうかという疑問がわいてきます。

ではどうすればよいのか、利用することと保全することのバランスをどう取ればよいのか、これはなかなか難しいテーマです。時と場所によっても違いますし、方法や程度によっても許容される幅が変わってきます。また身近な視点から、国際的な視野までズームを効かせることも欠かせません。しかしどこかに、これ以上は超えてはいけないという線があるはずです。

大切なことは、常に問題意識を持ってこのテーマを考究し、実行し、修正し続けることではないでしょうか。行政、ビジネス、教育、住民、NPO など様々な立場の人が、また様々な土地の人が、それぞれ自分の立ち位置と全体との関係を考えながら、難問に当たっていくことが求められると思います。

社会でこの一翼を担うためには、どのような知識を身に付ければよいのでしょうか。いくつか科目を選んでみましょう。自然環境に関する基礎的なことや起きている現象は、**サイエンスカフェⅢ（生態学）**、**自然環境論Ⅰ～Ⅳ**、**環境科学Ⅱ～Ⅲ**などで多くのことが学べます。**自然環境政策論Ⅰ～Ⅱ**では全体を俯瞰して幅広く人と自然との関係のあり方について考える材料が得られるでしょう。また**気候変動論Ⅰ～Ⅱ**では地球的規模に立った自然環境の捉え方を、**環境倫理学Ⅰ～Ⅱ**では人の視点に立って、自然に対する道徳観や付き合い方を学べるでしょう。そのほか、社会的な観点からは、**自然災害論**、**環境社会論Ⅰ～Ⅲ**、**地域コモンズ論**、**日本環境史論Ⅰ**、**環境人類学Ⅰ～Ⅲ**などが、国際的な俯瞰力を培うには**国際環境法**、**国際環境政策Ⅰ～Ⅱ**、**国際経済協力論Ⅱ**、様々な実施主体または手立ての視点からは**NGO 活動論**、**自治体環境政策論Ⅰ～Ⅱ**、**環境教育論**などが幅広い知識を授けてくれることと思います。

幅が広すぎてとらえどころがない、と感じるかもしれませんが、多角的な考え方や見方を吸収することで、問題を解決に導く独創的な思考につながるとと思います。皆さんの年代は最も吸収力が旺盛です。多くの知識をたくさんの引き出し（ラベル付き整理箱）に入れ、それを自在に引き出せるようにできれば、ひとつの専門分野では解決が難しい難問を解決に近づける力をつけることができると思います。

2. テーマに関連した推奨科目

自然環境政策論Ⅰ～Ⅱ、サイエンスカフェⅢ（生態学）、自然環境論Ⅰ～Ⅳ、環境科学Ⅱ～Ⅲ、気候変動論Ⅰ～Ⅱ、環境倫理学Ⅰ～Ⅱ、自然災害論、環境社会論Ⅰ～Ⅲ、地域コモンズ論、日本環境史論Ⅰ、環境人類学Ⅰ～Ⅲ、国際環境法、国際環境政策Ⅰ～Ⅱ、国際経済協力論Ⅱ、NGO 活動論、自治体環境政策論Ⅰ～Ⅱ、環境教育論 など

テーマ：「持続可能性（サステナビリティ）」の多様性を考える

関連の深いコース：各コースに共通するテーマです

1. このテーマを学ぶために

人間環境学部のテーマは「持続可能な社会の構築」ですが、「持続可能性（サステナビリティ）」という言葉の意味を考えたことはありますか。また、環境や社会を考えるときに「多様性」という言葉も多く聞きますね。より良い＜未来＞を築くために必要なキーワードとして用いられる「持続可能性（サステナビリティ）」という言葉ですが、その意味は様々で、文化の多様性に深く関わります。

「持続可能性（サステナビリティ）」と聞いて、あなたのようなイメージを思い浮かべますか。また、例えば、福島県の漁業者、鎌倉野菜の生産農家、温暖化の影響で「海に沈む」と言われている南太平洋の国ツバルの島民、JICA 海外青年協力隊員、ニューヨークのホームレス、スターバックスジャパンの CEO、マイクロソフト社のビル・ゲイツ、にとって持続可能性のイメージとはどのようなものでしょうか。往々にして異なるでしょう。それはなぜでしょう？また、そうした「差異」は、我々が「持続可能な社会の構築」を実現するために、どのような課題を投げかけるのでしょうか。

「持続可能性（サステナビリティ）」を目指す活動は日本国内だけでなく、海外にも沢山ありますが、それらの事例はそれぞれ、誰が、誰（何）のために、どこで、どのような方法で実現しようとしているのでしょうか。また、それらの活動の「成功」または「失敗」というのは誰の視点で、どのように判断されているのでしょうか。在学中に、様々な角度から「持続可能性（サステナビリティ）」を学び、卒業するまでにその意味について、自分なりの考えを述べるができるようになります。それが、人間環境学部の卒業生としての自信と誇りに繋がると思います。

環境人類学 I、II、IIIを通して「持続可能性（サステナビリティ）」と文化の多様性の関係について学びながら、興味のあるテーマに沿って様々な分野の科目を履修し、フィールド調査で実践を観察しましょう。以下は興味ごとのテーマと履修科目の例です。

A) 「持続可能な開発」や「持続可能な発展」について興味がある場合：

途上国経済論、国際経済協力論、社会開発論、NGO 活動論、国際関係論、科学技術社会論など

B) 「持続可能な資源利用」について興味がある場合：

地域コモンズ論、自然環境政策論、国際環境政策、国際環境法、国際関係論、食と農の環境学、環境経営論、環境ビジネス論、エネルギー論、エネルギー政策論、科学技術社会論など

C) 「持続可能なまちづくり」について興味がある場合：

地方自治論、地域形成論、自治体環境政策論、地域経済論、地域コモンズ論、NPO・ボランティア論、都市デザイン論、自然災害論、防災政策論、科学技術社会論など

2. テーマに関連した推奨科目

環境人類学 I, II, III に加え、興味のあるテーマごとに上記の科目例を参考に関連する理論や事例研究を学びましょう。また、フィールド調査を通して、「現場」を観察し、自分の考えを深めましょう。上記の科目以外にも、「持続可能性（サステナビリティ）」の＜意味＞を考えるために必要な、人文科学的思考力も磨きましょう（例えば：文化人類学 I, II、日本環境史論 I, II、環境表象論、環境倫理学 I, II など）。

テーマ：発展途上国の貧困と環境問題を考える

関連の深いコース：グローバル・サステナビリティコース、ローカル・サステナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

私たちは、地球という有限の空間、有限の資源のもとで暮らしています。このような制約があるなか、現在の先進国の人間のライフスタイルが、発展途上国の人々すべて（たとえばインドや中国に暮らす 20 億人以上の人々を想像して下さい）にも享受される日が来る、と考えるのはどうやら無理がありそうです。

一方、発展途上国においては、貧困が大きな問題となっています。貧困は単に所得が低い、お金がない、という問題にとどまりません。貧困は、健康や生命にも影響を及ぼし、人々が自らの将来を選びとり、作り上げる力をも削いでしまうものです。したがって発展途上国においては、引き続き「開発」や「発展」、「経済成長」が目標とされ、そのための努力が行われています。

では、「開発」や「経済成長」と「環境（保全）」は両立するのでしょうか。それともこれらを対立するものと捉えること自体が間違っているのでしょうか。また、途上国の人々の未来（目標）は、現在の私たち先進国の社会や人々の暮らしと同じものなのでしょうか。先進国と途上国いずれに暮らすかを問わず、「持続可能な社会」の名の下にどのような社会や経済の姿が私たちの行く末にあるのでしょうか。

在学中にこのようなテーマについて深く考えるためには、以下のような切り口のいずれかまたは複数をあわせて学び、考えることが有用だと思われます。

（ア）発展途上国の社会や経済を知り、「開発」や「経済成長」について考える

→ 途上国経済論、国際経済協力論、社会開発論、ミクロ経済学、NGO 活動論など

（イ）「環境」と「人間」や「社会」、「経済」の関係について知る

→ 環境経済論、環境社会論、環境人類学、国際環境政策、国際環境法、国際関係論、環境経営論、環境倫理学、食と農の環境学など

（ウ）日本における地域社会のありようと未来について知る（他国のことをよく知り、考えるには、まず日本のことをよく知り、考える必要があります）

→ 地方自治論、地域形成論、地域経済論、地域コモンズ論、自然環境政策論、現代社会論、NPO・ボランティア論など

なお、上記（ア）～（ウ）とは別に、環境問題に関する自然科学的な知識も同じように重要です。

2. テーマに関連した推奨科目

途上国経済論Ⅰ・Ⅱ	国際経済協力論Ⅰ・Ⅱ	社会開発論	ミクロ経済学
環境人類学	環境社会論	環境経済論	環境社会論
国際関係論	環境倫理学	地域コモンズ論	地域経済論
NGO 活動論	国際環境政策	自然環境政策論	食と農の環境学

テーマ：文化や社会のありようとあるべき姿を哲学的・思想的に考える

関連の深いコース：人間文化コース、グローバル・サステイナビリティコース、ローカル・サステイナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

私たちが、文化や社会について考えるうえでさまざまな学問的分野によるアプローチがありますが、そのなかの 1 つに哲学や思想によるアプローチがあります。このアプローチは、文化や社会がどのようなになっているかを把握する側面と文化や社会がどのようなであるべきかという理念を提示する側面の 2 つから構成されます。

現代社会において基本的かつ不可欠だとされている諸概念は、長い思想的伝統のなかで多くの議論により培われてきたものです。諸概念を理解し、理論的枠組みを身につけ、新たな理念を提示するために、哲学・思想系の科目を出発点に古今東西の哲学者・思想家・社会学者などをはじめとする理論家たちとの知的格闘を通じて、1 つの物事について自らの知力を振り絞り、「...とは何か」、「...はどうあるべきか」と徹底的に、かつ多面的な観点から討究する姿勢が必要です。この学問モデルは、一見自明とされているような文化や社会の姿を絶えず問い直し続けるため、サステイナビリティ・スタディーズの最も基盤をなす分野であると同時に、それに取り組む自分自身への反省と相対化をも迫るものと言えます。

こうした基本的な営みを可能にしてくれるのが、「現代思想と人間Ⅰ・Ⅱ」、「現代社会論Ⅰ」、「西欧近代批判の思想」、「仏教思想」などの科目です。また、こうした理論や理念が実際に文化や社会の具体的な場面においてどのように価値づけ、正当化などのかたちで適用されているかを考察するのが、「現代社会論Ⅱ・Ⅲ」、「環境倫理学Ⅰ・Ⅱ」、「応用倫理学」、「憲法の基礎」などの科目でしょう。

政策を構想・実行するためには理念が必要ですが、理念の提示には、現実がどのようなになっているか、〈出来事〉から出発しその相貌の正確な把握が前提となります（「フィールドスタディ（FS）」や「キャリアチャレンジ」、「人間環境セミナー」といった社会連携科目もそのためにあります）。その基礎的知識の涵養のために、法律・政治関連や社会・地域関連など他領域の関連科目も受講しましょう。たとえば、「市民社会と政治」、「環境社会論Ⅰ-Ⅲ」、「労働環境論Ⅰ・Ⅱ」などがその代表例です。

ただし、ある 1 つの思想は、1 人の思想家により単独で生み出されるのではなく、当時の巨大な歴史・社会的な文脈を必ず背景に持ちます。さらに科学技術の発展・進歩は、社会のあり方を変えるだけではなく、人間の認識の枠組みそのものをも根本的に変化させます。一方、たとえ同時代であっても地域や社会のあり方によって認識のあり方は異なります。人間の文化的営為や世界観について、「ヨーロッパ環境史論Ⅰ・Ⅱ」、「日本環境史論Ⅰ・Ⅱ」、「環境人類学Ⅰ-Ⅲ」、「地域協力・統合」といった、歴史学や人類学などの科目により、各時代・各地域による特異性や各時代・各地域に共通する普遍性を理解しましょう。

もちろん、現在に至るまで、人間の営為が社会空間のなかで、文学や芸術などのさまざまな表現形態を通じ、どのように世界を表象してきたか、それらの文化事象の構造を解析し検討することも必要な作業です。「西洋美術史論」、「日本美術史論」、「比較演劇論Ⅰ・Ⅱ」、「日本詩歌の伝統」、「環境表象論Ⅰ・Ⅱ」といった、文学、美術、演劇などの表象文化を対象とした授業はその手がかりにきつとなるはずですが、そして、行政や企業、NPO などがそれとどのように関わっているか、「文化経営論」で把握することなしには現代ではもはや成り立たないのかもしれない。

以上の科目群でこのようなテーマをこの学部の専門科目だけで体系的に網羅できるかというと、残念ながらそうではありません。したがって、人間環境学部の科目だけではなくて、ILAC のリベラルアーツ科目や総合科目、そして文学部、国際文化学部、法学部などの他学部公開科目をうまく利用する必要があるでしょう。

さらに、皆さんは、研究にあたり自らの専門地域を設定するわけですが、その地域で用いられている言語を、必修語学以上の高いレベルで運用できなければ資料へのアクセスすらおぼつきません。また、たとえ専門地域が自らの母語を使用する地域であっても、今や自らの研究を発信し他者

の研究を受信していくためには、英語をはじめとする外国語能力は必須となっています。コミュニケーションに関する理解も不可欠でしょう。それゆえ、語学に関しては、**ILAC** や国際文化学部の**語学科目**、コミュニケーション理解については、**「グローバル・コミュニケーション」**を積極的に受講してください。ちなみに、みなさんが英語をもし専門外国語とするのであれば、**「スタディ・アブロード」 (SA)** や **SCOPE 科目**にもぜひチャレンジしてみてください。

2. テーマに関連した推奨科目

「現代思想と人間 I・II」、「環境倫理学 I・II」、「応用倫理学」、「西欧近代批判の思想」、「仏教思想」、「現代社会論 I・III」、「ヨーロッパ環境史論 I・II」、「日本環境史論 I・II」、「地域協力・統合」、「環境人類学 I・III」、「西洋美術史論」、「日本美術史論」、「比較演劇論 I・II」、「日本詩歌の伝統」、「環境表象論 I・II」、「文化経営論」、「市民社会と政治」、「環境社会論 I・II」、「労働環境論 I・II」、「憲法の基礎」、「グローバル・コミュニケーション」、ILAC 科目（語学科目・リベラルアーツ科目・総合科目）、「フィールドスタディ」、「キャリアチャレンジ」、「人間環境セミナー」、SCOPE 科目、「スタディ・アブロード」 (SA)

テーマ：歴史学とサステイナビリティ

関連の深いコース：人間文化コース、ローカル・サステイナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

歴史学は、過去の社会のなりたちをできる限り忠実に明らかにしようとする学問です。この歴史学は人間環境学部の学びにとってどのように役立つのでしょうか。ここではサステイナビリティ（持続可能性）という概念を軸に考えてみましょう。

歴史学では、サステイナビリティは、ある社会が、その現在持っている政治や経済、文化などの仕組みを、その将来においても大きく変更することなく発展させていくことが可能である状態を指すと言えます。とくに自然環境との関係が中心になることが多いようです。過去のさまざまな地域の社会と自然環境との関係は、それぞれ異なっていました。それがサステイナブルなものであったのか、どの程度自然と人間は共生してきたのか。歴史学は、まず第一にそうしたサステイナビリティについて考えていく際のベースメントとなる、基本的な知識やデータを提供することができます。これをサステイナビリティの機能主義的理解と呼んでいいでしょう。

もう一つの可能性は、サステイナビリティという考え方自体の中に、ある種の歴史性を見出していくというものです。サステイナビリティは、せいぜい50年ほどの歴史しかない、きわめて新しい概念のひとつです。この概念がどのような事情から生まれ、どのようにして通用力を持つにいったか、それ以前にはどのような考え方があったのか、それを検証すること、すなわちサステイナビリティの歴史的理解も、人間環境学部における歴史学の重要な課題であると言えるでしょう。

そのような歴史的な存在としてのサステイナビリティについて、さらに一步進んで、歴史学はそのイデオロギー的な側面を問題化していくことも可能です。現代社会において、サステイナビリティ概念は、特定の価値判断と結合し、道徳的な規範としての優越的な位置を要求することがあります。とくに自然との関係にのみ限定して理解される場合はこの傾向が強いようです。このような道徳的価値としてのサステイナビリティは、そのほかの価値観とどのような関係を結ぶのでしょうか。たとえば、人権や民主主義といった価値観はどうでしょうか。自然環境との共存関係をはかりつつ、人権侵害をおこなうような社会は、サステイナブルと呼んでもいいのでしょうか。過去の事例に則して、こうしたイデオロギーとしてのサステイナビリティの側面を問い直すことも、歴史学の射程に入ってきます。

このように、歴史学は、サステイナビリティをさまざまな角度から理解することを通じて、過去の社会のあり方を検証し、そのさまざまな評価を可能にしていくものなのです。

2. テーマに関連した推奨科目

ヨーロッパ環境史論	日本環境史論	環境哲学基礎論	現代社会論
都市環境論	環境社会論	社会開発論	衛生・公衆衛生学
環境ビジネス論	市民社会と政治		

テーマ：環境法

関連の深いコース：ローカル・サステナビリティコース、サステナブル経済・経営コース、グローバル・サステナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

人間環境学部の皆さんが、この学部をご卒業後、企業に就職される場合、公務員になられる場合、または、NPO などの活動に参加される場合のいずれであっても、環境法の基本を習得しておく必要があります。これは、環境法の多くが、環境関連の活動・行為に関して強制力をもって規制しているためで、知らないままではすみません。

環境法を学ぶとき、まず知っておかなければならないことは、「環境法」という名前の法律が存在しているわけではなく、この言葉は、環境にかかわる法律分野を表す総称であるという点です。

環境法をもう少し細かく分けると、環境私法（環境民事法）、環境行政法、環境国際法、環境刑法に分けることができます。それぞれ、民事法（民法など）、行政法、国際法、刑法が、環境に関連して発展してきた分野です。そのため、たとえば環境私法を学ぶためには、まず「民事法Ⅰ・Ⅱ」を学ぶというように、それぞれの**基本部分にあたる科目（民事法Ⅰ・Ⅱ、行政法Ⅰ・Ⅱ、国際法Ⅰ・Ⅱ、刑法の基礎）**を学んだ後で勉強された方が、わかりやすいと思います。

皆さんが社会で環境関連の仕事で活躍されるために、是非とも**環境法Ⅰ、環境法Ⅱ、環境法Ⅲ、環境法Ⅳ**を学ばれることを強くおすすめします。

また、憲法は、わが国の根幹を規定するものですので、**憲法の基礎**を勉強する価値が十分にあると思います。また、社会に出て働くときの課題を扱う**労働環境法**も重要です。

最後に、自分の国の環境法がどのようなものであるかを知るためには、他国との比較が欠かせません。また、将来、国際的な仕事に就くことを目指している方には、外国法の基本的な知識や国家間の関係を知ることが必要です。そのため、**アメリカ法の基礎、アメリカ環境法、国際関係論**を勉強することをおすすめいたします。

2. テーマに関連した推奨科目

憲法の基礎	国際法Ⅰ・Ⅱ	環境法Ⅳ	国際環境法
行政法Ⅰ・Ⅱ	環境法Ⅰ	労働環境法	国際関係論
刑法の基礎	環境法Ⅱ	アメリカ法の基礎	
民事法Ⅰ・Ⅱ	環境法Ⅲ	アメリカ環境法	

テーマ:卒業後の仕事、労働環境について考える

関連の深いコース:サステナブル経済・経営コース、ローカル・サステナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

仕事や雇用についての学習は領域融合的であり、既存の様々な分野について学際的に学ぶことが必要とされます。とくに関連が深いものとしては経済学や労働経済学、経営学、社会学（労働社会学）、社会政策、労働法等があります。

ただ、領域融合的な勉強は必ずしも容易ではありません。たとえば法学部で法律を勉強しようと思えば、まず入門としての法学を勉強し、続いて、あるいはそれと並行して憲法を、その後に民法や刑法、家族法などの個別法を、やがて訴訟法へと順に勉強し、知識を積み上げていくことになります。したがって、どの時点、どの段階で、どんな本を読めばよいかについても一定の共通理解があり、とりあえずはそれらの法律名がついた教科書を読むことからスタートすることができます。

ところが、雇用や労働環境のような領域融合的な分野を勉強するには、どこから手をつけたらよいのか、そこで立ち止まってしまうことも往々にしてあります。関係する教科書はあってもきわめて限られているか、ない、ということもしばしばです。そこで、人間環境学部でこれらのことを学ぶとしたら、どのような勉強方法が可能かについて、本学部の開講科目に沿って簡単に示しましょう。

まず、人間環境学部の5つのコースとの関連でいえば、サステナブル経済・経営コースやローカルサステナビリティコースが中心になります。一般的な知識として経済、経営、企業、社会、労働法などの知識が必要とされます。なかでも中心となる科目は「労働環境論Ⅰ」と「労働環境論Ⅱ」で、その他就職や仕事に関連したものとして「キャリア入門」（英語での授業）があります。雇用問題である限り経営学（「現代企業論」）は企業と雇用について学ぶ場合の背景や基本を知るために重要です。なかでもCSR論（「CSR論Ⅱ」）は、労働環境に対する企業の社会的責任を考えるとときに最も重要なテーマを扱っています。その他、労働環境を考える場合の法的な枠組みについては、労働法（「労働環境法」）が教えてくれます。また、この分野の勉強にとって労働組合や経営者団体の理解は不可欠ですが、そのためには社会学、とくに社会学、とくに労働社会学や産業社会学の勉強も重要な一部になります（「現代社会論Ⅰ・Ⅱ」）。ここでは貧困や教育、ジェンダー、外国人、家族に関連する広いテーマが扱われ、それらは雇用問題と密接に関係します。また、近年、社会問題化している働く人のメンタルヘルスや過労死、少子・高齢化などの問題を考えるには「衛生・公衆衛生学Ⅲ」も多いに役立ちます。

こうした勉強をしていくために、その前提として、雇用や労働環境が環境学一般のなかにもどう位置づけられるかを知ることが必要になります。そのためには必修の「人間環境学への招待」があります。また、これらの分野に関係なく、私のようにオーストラリアの雇用問題を研究していると、英語が不可欠になることは言うまでもありません。

2. テーマに関連した推奨科目

人間環境学への招待	労働環境論Ⅰ	労働環境論Ⅱ	キャリア入門
労働環境法	現代企業論	現代社会論Ⅰ	現代社会論Ⅱ
CSR論Ⅱ	衛生・公衆衛生学Ⅲ		

テーマ：日本環境史を学ぶために

関連の深いコース：ローカル・サステイナビリティコース、人間文化コース

1. このテーマを学ぶために

環境問題は、近年発生したもののように思われがちですが、そうではありません。人々は古くからさまざまな環境問題に直面し、その都度試行錯誤しながら最善の対策をとってきました。つまり、環境問題の取り組みには長い歴史があるのです。その環境問題発生のメカニズムやその解決にむけた先人の取り組みを、それぞれの時代の政治・経済・文化と関連づけながら学び、現代の環境問題解決に資するのが環境歴史学（環境史学）という学問なのです。

さて、環境史を学ぶ目的には、大別してつぎの2つがあります。1つは、環境史を学ぶことによって、それにかかわる基礎的な素養を身につけ、さらに新たな人間と環境との歴史を究明することを目的とするものです。2つめは、現代の環境問題を解決する糸口を見出すために、環境史の教養を身につけることを目的とするものです。学習の目的は異なっても、環境史を理解しているかどうかは、現代の環境問題の解決に大きな影響を与えるのではないかと考えています。

それでは、環境の歴史はどのように学んでいくのでしょうか。たとえば、歴史的に人間は自然や動物とどのようにかかわってきたのか、あるいはわが国の歴史のうえでゴミ問題はいつごろから発生し、それに人間はどのように取り組んできたのか、という課題を設定しましょう。これらの歴史は、それぞれのテーマにそって歴史事実を明らかにしていく必要があります。そのためには、歴史資料（古文書、古文献、絵画、石造物など）の読解と分析が不可欠です。それらを通じて、新たな環境の歴史が判明するのです。

このほか、環境史の範囲は、現代的な課題ですが、歴史・文化の歩みのなかで残されてきた歴史遺産としての文化財（伝統的建造物群・天然記念物・文化的景観等）の保護にもおよびます。文化財の由緒やその保護の取り組みと課題を考え、私たちはこれまで残された文化財を未来に残していく対策を緊急に講じる必要があります。

この学部で、人間と環境との歴史を直接的に学ぶことができるのが**日本環境史論ⅠⅡ**です。ここでは、人間と自然とのかかわりの歴史を究明するテーマとして、開発と環境破壊、山林保全、動物保護、公害など、そして江戸の都市環境とのかかわりの歴史では、都市計画、ゴミ問題、物質循環、衣食住、医療、癒し空間などの実態把握とその取り組みを多様な視点から学習しています。その際、歴史資料の調査・読解・分析が欠かせません。なお、私の研究会を希望する学生は、**日本環境史論ⅠⅡ**を履修してください。

2. テーマに関連した推奨科目

まず、歴史の基礎を理解するために「市ヶ谷基盤科目」の**日本史ⅠⅡ**の履修をお勧めします。また、日本の環境の歴史と密接に関係する「専門科目(展開科目)」の推奨科目としては、**環境人類学ⅠⅡ**、**環境表象論ⅠⅡ**、**ヨーロッパ環境史論ⅠⅡ**、**環境倫理学ⅠⅡ**、**日本美術史論**、**仏教思想**などがあります。さらに、さまざまなテーマを現代の環境問題と関連づけて考えたい場合には、**自然環境論ⅡⅢ**、**環境社会論ⅠⅡⅢ**、**都市環境論ⅠⅡ**、**食と農の環境学ⅠⅡⅢ**、**地域経済論ⅠⅡ**などを履修しておくといでしょう。

履修モデル作成者：長谷川 直哉

テーマ：企業と社会のサステナビリティ（持続可能性）を学ぶために

関連の深いコース：サステナブル経済経営コース、ローカルサステナビリティコース、
グローバルサステナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

現代社会では企業の強大な経済力が、国境を超えて地球環境や人々の生活に多大な影響をもたらしています。SDGs（持続可能な開発目標）やパリ協定（脱炭素）の登場によって、化石燃料依存型経済から脱炭素経済への移行が求められています。

企業は SDGs を達成する上で重要なパートナーと位置づけられており、企業が果たすべき役割はこれまで以上に拡がりをみせています。このテーマでは、大量生産・大量消費時代の終焉、地球環境問題の深刻化、CSR（企業の社会的責任）に対する関心の高まり、知識集約型社会への移行という外部環境の変化を踏まえ、企業を取り巻く様々な現代的課題を取り上げつつ、サステナビリティ社会の実現に貢献する企業経営のあり方を学びます。

企業は、利潤追求を最大の目的とする組織として誕生しましたが、1990年代初頭に顕在化した地球環境問題によって、多くの企業はサステナビリティ社会の構築を目指した SDGs 経営の推進、財務情報と非財務情報を統合した情報開示の実践、マルチステークホルダーとのパートナーシップなどに取り組んできました。このような努力ににもかかわらず、多くの資源や汚染のフローが、持続可能な限界を既に超えてしまっているとの指摘もあります。

こうした懸念に対して、企業を中核とするこれまでの社会経済メカニズムを見直す必要があるのではないかという問題提起がなされ、CSRやSDGsの視点から、企業経営のあり方が問い直されようとしています。社会経済システムの中核に位置する企業経営と CSR・SDGs の関係を理解することは、民間企業や公務員などを問わず、社会のあらゆる分野で求められる知識なのです。

経済問題、環境問題、社会問題などは一面的なアプローチでは解決できない要素を含んでいます。さまざまな社会課題に対する答えは一つに定まらないため、経営・経済・社会・法律・政策・倫理などに関連する科目を学習し、社会科学と人文科学をバックボーンとする多面的な視野を持つことが求められます。さらに、企業や社会システムの実態を的確に理解するには、自然科学分野の科目を学習し、数理的・科学的なものの見方や考え方を身につけることも必要となります。

最後に、現代社会が内包する諸問題の解決に向けて、それらを総合的に分析・評価するスキルと分野を越えて協働するためのコーディネート能力を身につけることも心掛けてください。

2. テーマに関連した推奨科目

【基幹科目】	現代企業論	ビジネスヒストリー	経営学入門
現代社会論 I	NPO・ボランティア論	日本環境史論 I	ヨーロッパ環境史論 I
気候変動論 I	気候変動論 II		
【政策科目】	CSR 論 I II	環境経営論 I II	環境ビジネス論
国際環境政策 I II	環境経済論 I II	地域経済論 I II	労働環境論 I II
環境社会論 I II	環境科学 I II		

テーマ：中国の環境問題について考える

関連の深いコース：人間文化コース、グローバル・サステナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

1978年に「改革開放政策」が打ち出されて以来、中国の経済は目覚ましく発展してきました。一方、その急速な発展によって、水不足やエネルギー不足が深刻化し、PM2.5に代表される大気汚染など環境問題も発生しています。

「南水北調」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？それは、長江の水を中国北部に運ぶという遠大な計画をあらわす言葉です。「調」には「動かす、調達する」という意味があります。水資源が豊富な中国南部から水不足に悩む中国北部に水を運ぶ大プロジェクトをさす言葉です。この「南水北調」は三つのルートが計画されています。そのうち、江蘇省の長江下流と天津などを繋ぐ東ルートは2002年に着工され、13年末に1期工事が完成して送水が始まりました。この東ルートは他の二つに比べて技術的には容易なようですが、オープンな形で人口密集地を通すため水質の悪化が懸念されており、専門家の一部からは「汚水北調」になる危険性が指摘されています。長江の支流である漢江と北京・天津を繋ぐ中央ルートは03年に着工され、14年の末に送水が始まりました。送水の実施により、漢江の水量は中下流域で四分の一ほど減ると試算がなされており、水質の悪化や魚の産卵場所が失われるといった生態系への影響を懸念する声が専門家から出されています。

水や大気汚染、北京近郊まで押し寄せている砂漠化、有害廃棄物の越境移動、不法リサイクルなどなど、中国の具体的な環境問題を検討するには中国語で書かれた事例を中国語の原文で読む必要があるでしょう。

長い歴史をもつ中国の社会は複雑です。中国の環境問題に関しては、技術的側面や政策的側面からの研究だけではなく、人々の意識や文化、歴史的な側面から考察してゆく必要もあります。『論語』『孟子』『荀子』『老子』『莊子』『韓非子』『史記』『漢書』『三国志』といった中国の古典を読むことはその一助になるはずです。「環境」という観点から中国の古典を読み解く試みも近年なされています。

基礎科目の外国語として、必修中国語1～3、中国語4（重点）が用意してあります。4群の選択中国語にはコミュニケーションや視聴覚等に特化した科目も用意してあります。夏休み、春休みに企画される一か月程度の「中国短期留学」に参加することもよいでしょう。また、協定校へ1年間留学することが出来る「法政大学派遣留学生制度」もあります。中国（上海外国語大学・中央民族大学・首都師範大学）と台湾（國立中山大學、淡江大學、國立政治大學、元智大學、國立台灣師範大學）に関してそれぞれ毎年2名ずつ、計16名程度の枠があります。6ヶ月の留学の枠も近年出来ました。それらに挑戦することも考えてみてください。

なお、「中国の現地で地球環境問題を学ぶ」フィールドスタディが企画された場合は、参加することをお勧めします。中国の水不足、砂漠化の実態を知る貴重な体験になることでしょう。深刻化する中国の都市と農村の格差の問題を考える手がかりにもなると思います。

2. テーマに関連した推奨科目

〔基礎科目〕

必修中国語1～3、中国語4（重点）、中国語コミュニケーションⅠ・Ⅱ、中国語表現法Ⅰ・Ⅱ、中国語視聴覚Ⅰ・Ⅱ、検定中国語Ⅰ・Ⅱ、外国文学A・B（中国古典に親しむ）、外国文学A・B（日中比較）、外国文学と文化LC・LD（漢詩を作る）、東洋史Ⅰ・Ⅱ

〔専門科目〕

国際法Ⅰ・Ⅱ、環境法Ⅰ～Ⅳ、途上国経済論Ⅰ・Ⅱ、国際経済協力論Ⅰ・Ⅱ、環境倫理学、環境表象論Ⅰ・Ⅱ、環境哲学基礎論、自然環境論Ⅰ～Ⅲ、環境科学Ⅰ～Ⅲ、自然環境政策論Ⅰ・Ⅱ、大気と社会Ⅰ・Ⅱ、食と農の環境学Ⅰ～Ⅲ

テーマ：地域の文化を考える

関連の深いコース：人間文化コース

1. このテーマを学ぶために

1990年代以降、「ココロの豊かさ重視」「地方の時代」という風潮の中、文化政策やアートマネジメントが人々の文化環境を考える新たな分野として、地方自治体や関連学会などで注目を集めてきました。研究会「地域の文化を考える」は、現代日本のこうした流れを受けて開設しました。

学問としてこのテーマを学ぶにあたっては、まず内容としての文化・芸術に関心をもつことが重要ですが、市民（＝文化・芸術の消費者であり創造者）と地域（＝文化・芸術に関わる活動を可能にする場）の関係としくみを理解することが不可欠となってきます。

内容としての文化・芸術に親しむ基礎をつくるためには、とくに「場」の役割の大きい芸術として、演劇・美術などの科目の履修を薦めます。学部講義科目には、「**比較演劇論Ⅰ・Ⅱ**」・「**日本美術史論**」・「**西洋美術史論**」などがあります。また、フィールドスタディの「**演劇ワークショップシリーズ**」は、身体表現の基礎やコミュニケーションスキルを体験学習する場として効果的ですし、「**富山県の文化と自然を学ぶ**」や「**秩父の文化と風土を学ぶ**」などのフィールドスタディでは、地域固有の文化・芸術活動を考察します。もちろん、そうした学部専門科目を学ぶ前提として、市ヶ谷基礎科目の文学・芸術・歴史関連科目の履修が望ましいことは言うまでもありません。

地域の文化政策という文化・芸術活動を支える制度を考えるためには、地域社会のしくみを理解するために幅広く次のような科目を学ぶことも有効です。たとえば、地方自治の基礎を学ぶ「**地方自治論**」は、文化政策に特化した行政を考えるバックグラウンドとなります。また、文化・芸術活動といえども、お金を払って鑑賞する人がいなければ成り立たない以上、消費者や企業の行動、市場の原理などを学ぶ「**ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ**」やコミュニティ構築を視野においた「**地域経済論Ⅰ・Ⅱ**」などが地域の文化経済学の理解につながります。さらに、地域開発・まちづくりを系統的に学べる「**地域形成論**」や、近年芸術の分野でも進展がめざましいNPO法人について学ぶ「**NPO・ボランティア論**」、インタビューやアンケート調査など社会調査の方法を学ぶ「**フィールド調査論**」などはもちろんのこと、「**現代社会論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ**」で現代社会が抱える諸テーマを包括的に学ぶことや、「**都市環境論Ⅰ・Ⅱ**」で都市づくりの理論を学ぶことも、文化・芸術と「場」の関わりについて理解を深めることになるでしょう。

パノラマ的に文化・芸術と「場」の関わりを学ぶには、研究会「地域の文化を考える」の他、学部講義科目「**環境表象論Ⅰ・Ⅱ**」やフィールドスタディ「**富山県の文化と自然を学ぶ**」や「**秩父の文化と風土を学ぶ**」を薦めます。地域における文化・芸術活動の現在と展望を体系的に考えてみませんか？

2. テーマに関連した推奨科目

研究会「地域の文化を考える」、「**比較演劇論Ⅰ・Ⅱ**」、「**日本美術史論**」、「**西洋美術史論**」、フィールドスタディ「**演劇ワークショップシリーズ**」・「**富山県の文化と自然を学ぶ**」・「**秩父の文化と風土を学ぶ**」、市ヶ谷基礎科目の文学・芸術・歴史関連科目、「**地方自治論**」、「**ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ**」、「**地域経済論Ⅰ・Ⅱ**」、「**地域形成論**」、「**NPO・ボランティア論**」、「**フィールド調査論**」、「**現代社会論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ**」、「**都市環境論Ⅰ・Ⅱ**」、「**環境表象論Ⅰ・Ⅱ**」

テーマ：エネルギー

関連の深いコース：グローバル・サステナビリティコース、環境サイエンスコース

1. このテーマを学ぶために

福島第一原子力発電所の事故とそれに続く停電や節電要請などがおきて、エネルギー問題は市民生活に直接に関わる問題であることが広く実感されるようになりました。原子力発電のあり方について様々な意見がメディアで伝えられています。日本がそして世界が持続可能になっていくために、エネルギーをどうしていくかを考えることは決して避けて通れません。

エネルギー問題は簡単には解きほぐせません。資源、価格、安定性、リスク、二酸化炭素の問題、社会的許容性、国際関係など様々な要因が関わってくるからです。その意味では、学際的なテーマであるとも言えます。

例えば、原子力発電の問題では、どうしてもそれ自体のリスクだけに目を奪われがちですが、それだけではありません。二酸化炭素の排出削減をどうするか、核融合反応などの新たなエネルギー開発をどう進めるのか、原子力を天然ガスや新エネルギーに代替した場合のエネルギー価格の上昇や供給の不安定性をどう考えるか、中国やインドなどが本格的に進めようとしている原子力発電をどうとらえるか、日本の技術を高く評価する国への原子力の輸出をどうするか（日本が売らなければ韓国や中国など他の国が原子力発電所を売るでしょう）など、様々な問題が付随します。また、代替案として風力や太陽光などの再生可能エネルギーが注目されていますが、それらの発電にも騒音やバードストライク、使用済み太陽光パネルの処理などの環境影響が伴い、日本だけでなく欧米でも反対運動が起きています。日本は 2050 年までに脱炭素をすると公約しましたが、再生可能エネルギーだけで本当にエネルギー需要を満たせるのかどうか。このような要素を総合的に考えることが必要です。

人間環境学部でエネルギーに特化した科目は、理工学的な見地からエネルギーの基礎を講じる**エネルギー論Ⅰ**、水力、風力、太陽光など再生可能エネルギーの技術を講じる**エネルギー論Ⅱ**、そして、エネルギーをめぐる政策や経済を論じる**エネルギー政策論**があります。これらの科目を履修すれば、エネルギーに関する幅広い基礎知識を得ることができます。資源問題を講じる**環境科学Ⅲ**は、化石燃料の資源としての位置づけなどを論じるので参考になるでしょう。

気候変動論Ⅰと**気候変動論Ⅱ**ではエネルギーについて直接講じる場面は多くはないですが、エネルギーを語る場合に切り離せない気候変動（地球温暖化）についての講義ですから、関連して受講することをお勧めします。

フィールドスタディには風力発電などの新エネルギーを推進している現場を訪れる企画が提供されることもありますから、そのような機会に参加することも、良い勉強になるでしょう。

2. テーマに関連した推奨科目

エネルギー論Ⅰ、エネルギー論Ⅱ、エネルギー政策論、環境科学Ⅲ、気候変動論Ⅰ、気候変動論Ⅱ、（エネルギーに関連した）フィールドスタディ

テーマ：環境工学の基礎

関連の深いコース：ローカル・サステイナビリティコース、環境サイエンスコース

1. このテーマを学ぶために

「きれいな水」「きれいな空気」「快適な生活環境」 環境を学ぶ人にはなじみがある言葉でしょう。では、水や空気を汚す物質とは何でしょうか。水や空気を汚さないようにするには、どのようにすればよいのでしょうか。どこまできれいにすればよいのでしょうか。快適でない環境を改善するためにはどうしたらよいのでしょうか。汚染物質（汚濁物質）の種類と性質。除去の方法。快適環境の創造と維持。こうした問いに答えてくれるのが環境工学です。

環境工学を全然知らなくても「環境」の勉強はできます。修士論文だって書いてしまいます。社会科学系の大学院に行くと、「開発途上国における上水道事業民営化に付随する問題点の実証的検証」とか「〇〇市における一般廃棄物処理の限界費用の推定」みたいな、むずかしい論文を書いている大学院生がいます。でも、こういう学生に「浄水場ではどのようにして水道水が作られているのですか」とか「ゴミ焼却炉の排ガスはどのように処理されているのですか」と質問したら、きちんと答えられるのでしょうか。あまり期待できないのが現状なのです。

環境の二文字がついた学部で勉強するのであれば、あるいは環境の仕事や活動をしたい人であるなら、水や排ガスをきれいにする方法、つまり環境工学の教科書の最初に出てくるようなことくらいは知っておくべきではないかと私は思っています。

「食べ物や飲み水は絶対安全でなければいけない」「有害物質は一切使用してはいけない」「ゴミの焼却はしてはいけない」こういうのを無茶な要求と言います。ここまでひどくはなくても、それに近い「意見」や「要求」をよく耳にします。環境工学を理解していれば、そういう要求がなぜ「無茶」なのか。実際問題として、どこまでやれるのか、やるべきなのかが見えてきます。

人間環境学部は文科系学部ですから、専門的な工学を扱う講義はありません。けれども、以下の科目を履修することで工学系の「常識」を身につけることができます。**環境科学Ⅰ**と**環境科学Ⅱ**を履修してください。その上で、国家資格である公害防止管理者試験の受験を目指す**公害防止管理論Ⅰ及びⅡ**を履修すれば公害防止について、深く学ぶことができます。**廃棄物・リサイクル論**では廃棄物の基本的知識に始まり、処理技術、法制度など、廃棄物とリサイクルについて専門的に学習することができます。また、高校時代に化学を履修しなかった人、化学はどうも苦手という人は、これらの講義を受講する前に、なるべく**サイエンスカフェⅠ**を履修するようにしてください。

2. テーマに関連した推奨科目

環境科学Ⅰ、環境科学Ⅱ、公害防止管理論Ⅰ、公害防止管理論Ⅱ、廃棄物・リサイクル論、サイエンスカフェⅠ

テーマ：地球温暖化とその周辺を学ぶ**関連の深いコース：環境サイエンスコース****1. このテーマを学ぶために**

地球温暖化はグローバルな環境問題におけるもっとも重要な問題のひとつです。地球温暖化は大変大きな問題であり周辺に与えるインパクトも大きく、周辺領域にも多様な問題があります。したがって、皆さんが地球温暖化を学ぶとき、その対象になる問題やその学問的な切り口も多様です。どのような周辺問題を学ぶ場合にも、地球温暖化をはじめとする気候変動の科学的な理解は不可欠です。この履修モデルでは、地球温暖化の科学的な理解を深める履修モデルと、周辺問題へ発展させる履修モデルについて述べます。

まず、環境を自然科学から理解する基礎として、「サイエンスカフェⅠ～Ⅳ」を履修しましょう。この科目は、化学・生物学・生態学・物理学を高校のレベルで復習をするものです。とくに気候変動論そのものを理解するための基礎になるのは化学と物理学です。またその影響を学ぶためには生態学の基礎を学ぶと良いでしょう。

つぎに環境問題を地球レベルから理解するために、「自然環境論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を履修しましょう。とくに「自然環境論Ⅰ」では気候変動論に深く関連した事柄を学びます。

「気候変動論Ⅰ・Ⅱ」では、地球温暖化を中心として気候変動を深く学びます。気候変動のベースとなる気候システムの基礎から、地球温暖化や地球温暖化以外の気候変動についても深く学びます。是非履修しましょう。

これと平行して、エネルギー問題への理解を深めるために「エネルギー論Ⅰ・Ⅱ」も履修しましょう。地球温暖化とエネルギー問題は密接に関連した問題です。また、「環境科学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」は、地球温暖化が環境科学全般における立ち位置の理解に役立つでしょう。地球温暖化はグローバルな現象ですが、よりローカルな現象を理解するためには、「大気と社会Ⅰ・Ⅱ」が役立つでしょう。グローバルとローカルの両方の側面を理解することは重要です。また「環境モデル論Ⅱ」で学ぶシステムダイナミクスは、地球温暖化をはじめとするグローバルな環境問題を俯瞰的に理解するフレームワークとなるでしょう。

最後に、地球温暖化の周辺分野について考えます。エネルギー政策は、地球温暖化に密接な関係があります。「エネルギー政策論」の履修を推奨します。また、エネルギー政策と関連する事柄として、東日本大震災における原子力発電所の事故では、「科学技術社会論」を履修して科学技術と社会の関係を理解することは重要です。他の周辺分野の例としてまちづくりを考えるとときには、「都市環境論Ⅰ・Ⅱ」が役立つでしょう。さらに、地球温暖化はグローバルな問題なので「国際環境法」や「国際環境政策Ⅰ・Ⅱ」などを履修して、国際的な分野に進むこともできます。逆にローカルな取り組みに進むには「環境社会論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」などを履修するとよいでしょう。

2. テーマに関連した推奨科目

サイエンスカフェⅠ～Ⅳ	自然環境論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	気候変動論Ⅰ・Ⅱ	環境科学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ
大気と社会Ⅰ・Ⅱ	エネルギー政策論	科学技術社会論	都市環境論Ⅰ・Ⅱ
環境モデル論Ⅱ	国際環境法	国際環境政策Ⅰ・Ⅱ	環境社会論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

テーマ：持続可能な健康を目指すために

関連の深いコース：環境サイエンスコース、ローカル・サステイナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

地球環境問題は地球上で暮らす人間にとって重要な課題です。“持続可能性”という言葉が人間環境学部のキーワードとなっていますが、“持続可能な社会を目指す”ということは、“人間がいかにか健康で快適な生活を維持していくことができるか”ということに他なりません。地球環境が破壊されると人間の健康に大きな影響を与えるでしょう。考えてみると、環境問題は健康問題と言い換えることができるかもしれません。

日本において、自殺者数は1998年から2011年度まで連続して14年間3万人を超えていました。現在は3万人を割っていますが、いまだ多くの人が自ら命を絶っています。日本の自殺の特徴として、若い年代、あるいは働き盛りの男性の自殺が非常に多いことです。15歳から34歳の若年層においては死因のトップとなっています。昨年度は女性の自殺が大幅に増加しました。大学を卒業して働き始めた時、生活環境は大きく変化します。仕事の負荷に加えて、上司や同僚との関わりによるストレスも大きくのしかかってきます。そのような変化にどのようにして対応し、精神的な健康を保っていくかということもメンタルヘルス上重要な課題となってくるでしょう。現代社会においては、環境を幅広くとらえるようになってきました。産業保健の現場では、働く人を取り巻く環境として、空気環境や照明、建物などのいわゆる“ハード面”だけではなく、人と人との関わり合いといった“ソフト面”の環境もストレスの原因として重視していかなければなりません。

衛生・公衆衛生学ⅠⅢⅣでは、現代社会における健康問題をテーマに取り上げ、様々な知識を身につけていきます。人間環境学部の5つのコースとの関連でいえば、環境サイエンスコースが中心となります。しかし、正しい健康知識を備えることは、すべての人にとって不可欠であると考えますので、コースにこだわらずに履修して頂いてかまいません。また、自然環境科学の基礎（生物学）（サイエンスカフェⅡ）では、人の身体や病気について勉強します。健康を維持していくために自分の身体の構造や働きを知ることとはとても大切です。衛生公衆衛生学と共通するテーマもありますので、合わせて履修してください。

関連科目としては、医療、倫理などについて学ぶ「現代社会論Ⅲ」、健康観について学ぶ「環境健康論」、高齢化社会における雇用、労働環境などについて学ぶ「労働環境論」、労働者を守る安全衛生法や労働基準法などの法律について学ぶ「労働環境法」、健康や高齢社会、生命倫理について学ぶ「生命の現在と倫理」などがあげられます。少しでも人間の健康に関係している科目は衛生・公衆衛生学と接点があるといえるでしょう。

2. テーマに関連した推奨科目

環境健康論	I	II	生命の現在と倫理	現代社会論	III			
労働環境論	I	II	III	労働環境法	環境科学	I	II	
環境倫理学			心理学	I	II	倫理学	I	II

テーマ：新たな価値創造が求められる時代における「地域」を学ぶために

関連の深いコース：ローカル・サステナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

拡大するグローバル社会の中では、国家経済的なマクロな視点だけでなく、地域の主体性（ローカル・イニシアティブ）も同時に求められるようになっており、両者を統合した「グローカル」な視点を持つ議論は重要性を増しています。また、地域の再生と地域が主体となった新たな価値創生の必要性が叫ばれる今日、地域と経済の関係を多角的、複眼的かつ総合的な視点から議論することや、そのような能力を身につけた人材が様々な場面で求められています。

例えば地域経済学はこれらの課題に応えようとする研究分野で、地域経済の基盤である産業とその担い手に焦点を当て、地域に根差した暮らしや経済のありようを追究します。具体的には日本の農山漁村、地場産業地域でのフィールドワークを通して、小規模家族経営のしくみ、そこで女性たちが果たしてきた役割、地域資源の利活用の論理などに着目しながら、地域の主体性（ローカル・イニシアティブ）の意義、地域の経済発展とその課題について考えることができます。

私たちの生活の基盤は地域にあります。地域づくりは、本来、空間計画（土地利用、交通、都市施設、景観など）と同時に、社会計画（人口、福祉、教育、医療、ライフスタイルなど）および経済計画（雇用、産業、財政、投資など）が一体となった総合的なものです。これらを扱うためには、地域という場所の持つ固有の文化や歴史を知り、そしてまた、今日では何よりも人間活動を環境の中に相対化して考えてみる必要があります。

地域をテーマする場合、さまざまな学問や視点を要する総合的で学際的な議論が求められます。したがって、この方面での活躍を目指すようするには、主体的に多くのものを学習する必要があります。地域という対象においては、全ての分野がつながっているのです。どの学問を勉強しても無駄ということはありません。自分の得意な分野や独自の視野を持つことです。経済、歴史、地理、法律などいずれにおいても深い学びと思索の経験が、将来必ず役に立ちます。同時に、常に具体的で身近な地域や事象に興味を持つことです。日常生活の衣食住、人間関係、周囲の緑、水、景観、道路、交通、社会組織など、身の回りには多くの対象があります。まずは自分の住んでいる地域や日常から具体的興味を広げていくとよいでしょう。そして国内外の地域にも、その興味を広げていきましょう。授業では、**地域経済論Ⅰ・Ⅱ**で地域や産業の基本的な見方と現代的課題を、**食と農の環境学ⅠⅡⅢ**で食と農の過去・現在・未来について具体的に考えることができます。このほか**地方自治論**、**自治体環境政策論ⅠⅡ**、**環境社会論ⅠⅡⅢ**、**地域福祉論**、**フィールド調査論**など一連の社会地域関連科目を押さえると同時に、法律・政治、経済・経営、人文科学、自然科学のうちのいずれかをしっかり学びとり、地域に焦点を当てた自分の得意分野を主体的に築いていくことを勧めます。

2. テーマに関連した推奨科目

(社会・地域関連、基幹・政策科目 ほか)				(関連分野、諸科目)	
地域経済論Ⅰ・Ⅱ	食と農の環境学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	地方自治論	自治体環境政策論Ⅰ・Ⅱ	法律・政治関連の政策科目	経済・経営関連の政策科目
環境社会論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	現代社会論ⅠⅡⅢ	自然災害論	地域福祉論	自然科学関連の基幹・政策科目	人文科学関連の政策科目
フィールド調査論	ファシリテーション論			日本環境史論Ⅰ・Ⅱ	ヨーロッパ環境史論Ⅰ・Ⅱ

作成者：吉永 明弘

テーマ： 環境問題に倫理学の視点から取り組む

関係の深いコース： 人間文化コース、ローカル・サステナビリティコース

1. このテーマを学ぶために

今日の環境問題は社会のシステムの変革なしには解決しえない問題です。この社会をどう変えていくべきかを考えるのが環境倫理学です。倫理学というと、個人の心がけを求めるものと思われるがちですが、心がけだけでなく、社会のあるべき姿を考えるのが倫理学です。したがって、倫理学や環境倫理学をきちんと学ぶためには、人文学、社会科学、自然科学の基礎的な知識が必要になります。人間環境学部には、これらの授業がそろっていますので、さまざまな授業を履修することを望みます。

また、学生時代は何よりも読書が大切です。すでに高校まででたくさんの本を読んでいる人もいます。そういう人に出会うと、自分はもう立ち遅れているのではないか、と思ってしまうかもしれません。私もそうでした。しかし大学時代は一番読書の時間がとれるので、幅広い分野の本をたくさん読むことを勧めます。「年間 100 冊読む」といった量的目標をたてるのもよいでしょう。まずは量をこなすことが必要です。環境問題を考えるにはたくさんの知識が必要です。読書をすることでさまざまな知識を得ることができます。

環境倫理学は哲学の一部でもあります。哲学は「言葉」にこだわり、掘り下げて検討します。環境問題の「環境」とは何か、自然破壊の「自然」とは何か、「持続可能な開発」の「持続可能」とは何か、これらは自明ではなく、立ち入った検討が必要となります。議論をするときに、お互いが想定している「環境」「自然」「持続可能」の意味が違っていたら、議論がかみ合わないものになります。言葉の意味を明確にすることは、環境をめぐる社会的合意形成のための基礎的な作業と言えるでしょう。

まとめると、(1) 環境問題に倫理学の視点から取り組むということは、社会の変革を目指すことであり、そのためにはさまざまな知識を得ることが必要であり、(2) 哲学の観点からは、言葉にこだわることによって、環境をめぐる社会的合意形成の基礎的作業ができる、ということになります。

2. テーマに関連した推奨科目

上記のテーマに直接かわるのは「環境倫理学Ⅰ・Ⅱ」「応用倫理学」ですが、それだけでなく、以下の科目もとるべきだということが、上記の説明でお分かりいただけたかと思います。「西欧近代批判の思想」「現代思想と人間Ⅰ・Ⅱ」「科学技術社会論」「地球科学史Ⅰ・Ⅱ」「日本環境史論Ⅰ・Ⅱ」「ヨーロッパ環境史論Ⅰ・Ⅱ」「食と農の環境学Ⅰ-Ⅲ」「地域経済論Ⅰ・Ⅱ」「環境人類学Ⅰ-Ⅲ」「環境社会論Ⅰ-Ⅲ」「環境経済論Ⅰ・Ⅱ」「地方自治論」「NP0・ボランティア論」「自治体環境政策論Ⅰ・Ⅱ」「都市環境論Ⅰ・Ⅱ」「気候変動論Ⅰ・Ⅱ」「自然環境政策論Ⅰ・Ⅱ」。

テーマ：文系の立場から科学技術のありかたと政策を考える 履修モデル作成者：渡邊 誠

関連の深いコース：環境サイエンスコース

1. このテーマを学ぶために

2011年3月11日東日本大震災が起きた。我々は、自然のもつエネルギーの大きさにあらためて驚愕するとともに、科学技術の最先端にあったはずの原子力発電の安全神話が崩壊するという悲劇を経験した。これを契機に、現代に生きる我々は大きな課題を抱えていることを意識している。すなわち、「科学」とはそもそも何なのか？「技術」の目的と役割は一体何であるのか？我々の「ライフスタイル」をどのように設計し直せばよいのか？などである。科学と技術の在り方を再考し、人間の尊厳を守るとは何なのかを考え我々の暮らし方との関連を考察することは、極めて重要でかつ大きな課題であろう。

このテーマは、科学・科学技術と文明・現代社会などの関係性を分析することにより、新しい科学技術政策の方向性を検討し模索するためのものである。現代社会の現況を科学技術の発展（進歩）の結果として捉え、未来社会を創造するための指針を得るために、科学と科学技術の在り方を問い直しその政策を考えていく。このテーマでは次に示す4つの柱がある。

（1）歴史や思想などの素養：地球上に人類が誕生してから現代社会が構築されるまでの歴史や思想を通して人間と社会との関係、並びにその特質を理解する。人間はその昔、言葉、道具、火を作り使うことから進化してきた。例えば、「火」を使用しての火力発電は現代においても電力供給の中心的技術である。歴史上どのように環境問題が生じてきたのか？科学技術の「進歩」とはいったい何であるのか？を考えることは極めて重要である。

（2）人為とその現況の理解：科学技術社会の現状はどうなっているのか、どのような環境問題が具体的に存在するのか、などを理解する。高度に細分化され発達した科学技術は我々に物質的豊かさを与え利便性・快適性という恩恵をもたらした。同時にそれはローカル＆グローバルな環境問題も引き起こし、我々に対する脅威やリスクも大きく増加させる結果ともなっている。科学技術という側面を意識した上で、環境問題の具体例を知り、その構造を理解していくことは重要である。

（3）地球と自然法則の理解：科学技術の限界はいったいどこ（何）なのかを模索する。これは科学技術政策の方向性を検討する際の基礎となる。地球の構造、例えば、大気、海洋、陸水、土壌、火山などや生態系はどのようになっているのか、さらにそれらと自然災害との関連を理解することは重要である。また、環境問題に関わる自然法則性についてその概念を修得する必要がある。例えば、プラスチック廃棄物のリサイクル問題を「物質循環」という枠組みで検討するには、熱力学の（初歩的）知識が必要となる。エネルギーと物質の保存と劣化（拡散）に関する自然法則を理解することは地球システムとそこで展開されている人間活動の特徴を知るために必須の内容となっている。

（4）科学技術政策の模索：科学技術の社会的受容と公共政策、一般市民の科学理解とサイエンスコミュニケーション、エネルギーのあり方、自然災害と防災、など科学技術に関わる側面から政策へアプローチしていく。科学技術政策を検討する際には、一般市民の参加を伴いながら社会全体としての意思決定を導いていくためのプロセスを確立することの重要性を理解する必要がある。

2. テーマに関連した推奨科目

(1)環境人類学Ⅰ～Ⅲ	日本＆ヨーロッパ環境史論Ⅰ・Ⅱ	環境倫理学Ⅰ・Ⅱ	応用倫理学
(2)環境科学Ⅰ～Ⅲ	廃棄物・リサイクル論	エネルギー論Ⅰ・Ⅱ	自然環境政策論Ⅰ・Ⅱ 気候変動論Ⅰ・Ⅱ
(3)サイエンスカフェⅠ～Ⅳ	自然環境論Ⅰ～Ⅳ	自然災害論	環境モデル論Ⅰ・Ⅱ
(4)科学技術社会論	災害政策論	エネルギー政策論	FS（科学技術関連）